

一般国道1号北勢バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告VI

# 川向山添遺跡・江田川遺跡2

2022年（令和4年）3月  
四日市市教育委員会



川向山添跡・江田川遺跡全景(東から)



川向山添跡第2次調査区全景(西から)

## 巻頭図版2



川向山添遺跡 S H35カマド(北東から)



江田川遺跡第2次調査区全景(西から)

## 例言

- 1 本書は、四日市市が国土交通省中部地方整備局から委託を受けた、一般国道1号北勢バイパス道路建設予定地にかかる川向山添遺跡及び江田川遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 調査にかかる費用は、国土交通省中部地方整備局の負担による。
- 3 現地調査および整理作業は、下記の体制で行った。
  - ・調査主体 四日市市教育委員会
  - ・調査担当 四日市市教育委員会 社会教育課(平成31年度以降は社会教育・文化財課)
    - 平成28年度：主幹 清水政宏 嘴託 山本達也
    - 平成29年度：主幹 清水政宏 嘴託 山本達也
    - 平成30年度：主幹 清水政宏 嘴託 山本達也
    - 平成31(令和元)年度：主幹 清水政宏 嘴託 山本達也
    - 令和2年度：主幹 清水政宏 会計年度任用職員(フルタイム) 山本達也
    - 令和3年度：課付主任 清水政宏 会計年度任用職員(フルタイム) 山本達也
  - ・土工委託 國際文化財株式会社(川向山添第1次)株式会社島田組(川向山添第2次・江田川第2次)
- 4 報告書の作成業務は平成28～31年度及び令和2・3・4年度に四日市市教育委員会 社会教育・文化財課が行い、執筆・編集は山本達也が行っている。
- 5 報告書の作成にあたり、伊藤加奈子・石崎恵美・萩原なぎさ・後藤洋香・松崎由里ほか多数の協力を得た。
- 6 遺構実測図作成にあたっては、国土調査法による第VI座標系を基準とし、方位の表示は座標北を用いた。
- 7 本書に使用した遺構表示記号は、下記のとおりである。

S H: 穴穴住居	S B: 挖立柱建物	S K: 土坑	S D: 構
-----------	------------	---------	--------
- 8 本書で表記する色調は、農林水産省水産技術会事務局及び財團法人日本色彩研究所色票監修『新版標準色帖』(2002年版)に準拠した。
- 9 本書が扱う発掘調査の資料や出土遺物は、四日市市教育委員会が保管している。

## 本文目次

I	前言	1	2. 基本層位	12
1.	事業の概要	1	3. 遺構	12
2.	調査に至る経緯	1	4. 遺物	37
3.	文化財保護法等にかかる諸手続き	2	IV 川田川遺跡の調査成果	39
II	位置と環境	5	1. 調査の方法	39
1.	地理的環境	5	2. 基本層位	39
2.	歴史的環境	5	3. 遺構	39
III	川向山添遺跡の調査成果	10	4. 遺物	45
1.	調査の方法	10	V 結語	48

## 挿図目次

第1図	北勢バイパス建設予定地内(四日市市)	10
遺跡位置図	3	
第2図	遺跡位置図	6
第3図	川向山添遺跡・江田川遺跡位置図	7
第4図	川向山添遺跡一次調査区・江田川遺跡第2次調	7
第5図	川向山添遺跡構造配置図	11
第6図	川向山添遺跡土層断面図①	13
第7図	川向山添遺跡土層断面図②	14
第8図	SH1平面図・断面図、SH1遺物出土状況図	15

# I 前言

## 1. 事業の概要

一般国道1号北勢バイパスの計画は、三重郡川越町南福崎の国道23号を起点として朝日町・四日市市内を経て、鈴鹿市稻生町の中勢バイパスに接続する、全長28.4kmの幹線道路である。現在、三重県北部の幹線道路である国道1号及び23号は、四日市市の中心市街地で慢性的な交通渋滞が発生している。また内部でも住宅開発等により交通量が増大し、生活道路等の交通混雑が各所で発生している状況である。

このため、北勢バイパスは四日市市を中心とした北勢地域の内陸部を環状にバイパスし、臨海部の国道1号及び23号に集中する自動車交通を適切に分散して交通混雑の緩和、道路交通の安全を図ると共に、内部の地域開発の促進など、当地域の経済の発展に寄与することも期待されている。

## 2. 調査に至る経過

北勢バイパスの路線内における埋蔵文化財については、昭和63年度に三重県教育委員会が分布調査を実施した。その結果をもとに建設省中部地方整備局（現国土交通省中部地方整備局）と埋蔵文化財の取扱いについて協議を行ない、現状保存が困難な遺跡は事前に発掘調査を実施し、記録保存を図ることとなった（第1回・第1表）。

調査主体は当初、三重県教育委員会が行う計画であったが、四日市市内の遺跡については建設省（現国土交通省）、三重県教育委員会、四日市市教育委員会が協議を重ねた結果、四日市市教育委員会が調査を受託することとなった。

川向山派遺跡と江田川遺跡は北勢バイパス計画以前から知られており、共に古墳時代を中心とする遺跡となっていた。北勢バイパスの建設工事に先立ち、江田川遺跡の北勢バイパスの本線と側道にかかる部分については平成25年度に発掘調査を完了している（第1次調査）。川向山派遺跡は、平成25年10月23日から11月7日と、平成27年6月1日に事業地内にかかる約5,730m<sup>2</sup>を対象として一次調査を実施した。調査は、2m幅のトレンチ9本（第4図）を設定してを行い、トレーナー面積の合計は650m<sup>2</sup>であった。

調査の結果、事業地の遺跡範囲にかかる部分のうち、中～南部の範囲で堅穴住居や土坑、溝などの遺構を検出した。遺物は土師器・須恵器を確認し、3,040m<sup>2</sup>を要し、第一次調査範囲と判断した。

これを受けて平成28年度に行行った第1次調査ではA地区・B地区とした部分を、30年度に行行った第2次調査ではC地区とした部分の二次調査を実施した。なお、平成28年度と30年度の2ヶ年に分けて調査を行った理由は、川向山派遺跡の二次調査が必要な範囲内に中部電力送電鉄塔及び未買収地があったためである。

C地区内にある中部電力送電鉄塔については、当初鉄塔を廃した状態での調査も検討したが、困難であるとの結論に至り、令和2年度に上部構造物が撤去された後に改めてD地区として第3次調査を行い、別に報告書を刊行している（注1）。

また、北勢バイパスと交差する県道田光・四日市線は、北勢バイパスを立体交差で跨ぐ形となる。この交差橋の建設にあたって、工事期間中は県道を南側に迂回させる。その切り回し道路が江田川遺跡にかかるため、この部分の調査を行う必要が生じた。周辺の調査事例（注2）から遺構が存在することはほぼ確実と判断されたため、川向山派遺跡の調査と併せて発掘調査を実施することとした。

## 【註】

1. 四日市市教育委員会 令和4(2022)『江田川遺跡3・川向山派遺跡2・横谷遺跡2』

2. 四日市市教育委員会 平成28(2016)『江田川遺跡』

## 調査日誌(抄)

【川向山派遺跡第1次調査】(平成28年度)

6月17日 A地区表土掘削開始

6月22日 A地区表土掘削完了段階確認

6月24日 B地区表土掘削開始

6月27日 A地区包含層掘削開始

7月1日 B地区包含層掘削開始

7月14日 B地区遺構削除開始

8月1日 B地区遺構削除撮影

8月2日 A地区遺構削除開始

第9図 SH2・SH39・SH40平面図・断面図、SH2遺物出土状況図・・・・・・・・・・・・・・・・16
第10図 SH8・SH9平面図・断面図、SH8遺物出土状況図・・・・・・・・・・・・17
第11図 SH10・SH11平面図・断面図・・・・・・・・18
第12図 SH14・SH15平面図・断面図、SH15遺物出土状況図・・・・・・・・19
第13図 SH13・SH19平面図・断面図・・・・・・・・20
第14図 SH18・SH20平面図・断面図、SH18遺物出土状況図・・・・・・・・22
第15図 SH21・SH35平面図・断面図、SH35遺物出土状況図・・・・・・・・23
第16図 SH50・SH62・SH70平面図・断面図、SH50・SH62遺物出土状況図・・・・・・・・25
第17図 SH53・SH66・SK51・SK54平面図・断面図、SH53遺物出土状況図・・・・・・・・26
第18図 SH55・SH65・SK56・SK61平面図・断面図・27
第19図 SK57・SK58・SK69・SD59平面図・断面図、SK57・SK58遺物出土状況図・・・・28

## 挿表目次

第1表 北勢バイパス建設予定地内(四日市市)遺跡一覧表・・・・・・・・4
第2表 川向山派遺跡堅穴住居観察表・・・・38
第3表 川向山派遺跡掘立柱建物観察表・・・・38
第4表 川向山派遺跡溝観察表・・・・38

第20図 SB6・SB7・SK5 平面図・断面図・・・・・・・・29
第21図 SB24・SB25平面図・断面図・・・・・・・・30
第22図 SB27・SB36平面図・断面図・・・・・・・・31
第23図 SB37・SB38平面図・断面図・・・・・・・・32
第24図 SB64・SB67平面図・断面図・・・・・・・・33
第25図 SK4・SK16・SK22・SK23・SK31・SK60・SK63・SK68平面図・断面図・・・・・・・・34
第26図 SD12・SD26・SD28・SD29・SD30・SD32・SD33・SD34平面図・断面図・・・・・・・・36
第27図 川向山派遺跡遺物実測図①・・・・・・・・40
第28図 川向山派遺跡遺物実測図②・・・・・・・・41
第29図 川向山派遺跡遺物実測図③・・・・・・・・42
第30図 江田川遺跡遺構配置図・南壁断面図・・・・46
第31図 江田川遺跡SB69・SB71・SK70・SD68平面図・断面図・・・・・・・・47
第32図 江田川遺跡遺物実測図・・・・・・・・48

## 挿表目次

巻頭図版 川向山派遺跡・江田川遺跡全景、川向山派遺跡第2次調査区全貌、川向山派遺跡SH35カマド、江田川遺跡第2次調査区全景
図版1 川向山派遺跡A地区全景、川向山派遺跡B地区全景
図版2 川向山派遺跡C地区全景、江田川遺跡第2次調査区全景
図版3 SH1・SH1カマド
図版4 SH2・SH2カマド
図版5 SH8・SH8カマド
図版6 SH10・SH10カマド
図版7 SH11・SH13
図版8 SH13・19・SH14
図版9 SH15・SH15カマド遺物出土状況
図版10 SH18・20・SH18カマド
図版11 SH19・SH19カマド
図版12 SH21・SH35
図版13 SH35カマド遺物出土状況、SH50
図版14 SH53遺物出土状況、SH53
図版15 SH55段下げ状況、SH55
図版16 SH57・SH57カマド
図版17 SH62・SH62カマド
図版18 SB6・7
図版19 SB24・SB27・SB6・7
図版20 SB36段下げ状況、SB37・38段下げ状況
図版21 SB66段下げ状況、SB67段下げ状況
図版22 出土遺物
図版23 出土遺物

8月9日 B地区遺構写真撮影  
8月17日 遺構測量開始  
8月22日 A地区遺構掘削開始  
9月10日 現地説明会(参加者100名)  
9月15日 A地区遺構写真撮影  
9月23日 A地区遺構掘削終了  
9月30日 現場搬収完了

#### 【川向山添遺跡第2次調査】(平成30年度)

7月17日 調査前状況確認  
7月19日 表土掘削開始  
7月31日 包含層掘削開始  
8月1日 遺構掘削開始  
10月12日 ドローンによる空撮(巻頭写真)  
10月13日 現地説明会(参加者53名)  
10月19日 A地区遺構掘削終了  
10月23日 遺構測量開始  
10月24日 遺構掘削終了  
11月10日 埋め戻し開始  
11月30日 現場搬収完了

#### 【江田川遺跡第2次調査】(平成30年度)

11月7日 伐倒開始  
11月13日 表土掘削開始  
11月14日 包含層掘削・遺構掘削開始  
11月19日 遺構掘削終了  
11月20日 全景写真撮影・測量開始  
11月24日 埋め戻し開始  
11月30日 現場搬収完了

#### 3. 文化財保護法等にかかる諸手続き

文化財保護法(以下「法」)等に係る諸手続きは、以下により行っている。  
・法第94条第1項「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の発掘通知書」(国土交通省通知、県教育長宛)  
9月23日 A地区遺構掘削終了  
9月30日 現場搬収完了

#### 【川向山添遺跡第1次調査】(平成28年度)

・法第99条第1項「埋蔵文化財発掘調査の報告について」(市教育長報告、県教育長宛)  
平成28年6月20日付け、社会第126号  
・遺失物法第1条第1項「埋蔵文化財発見届」(市教育長届出、四日市北警察署長宛)  
平成28年10月28日付け、社会第126号-5  
・三重文化財保護条例第50条第3項「出土品譜与申請」(市教育長申請、県教育長宛)  
平成31年2月5日付け、社会第90号

#### 【川向山添遺跡第2次調査】(平成30年度)

・法第99条第1項「埋蔵文化財発掘調査の報告について」(市教育長報告、県教育長宛)  
平成30年7月18日付け、社会第359号  
・遺失物法第1条第1項「埋蔵文化財発見届」(市教育長届出、四日市北警察署長宛)  
平成31年3月19日付け、社会第359号-5

#### 【江田川遺跡第2次調査】(平成30年度)

・法第99条第1項「埋蔵文化財発掘調査の報告について」(市教育長報告、県教育長宛)  
平成30年11月12日付け、社会第365号-2  
・遺失物法第1条第1項「埋蔵文化財発見届」(市教育長届出、四日市北警察署長宛)  
平成31年3月19日付け、社会第365号-6



第1図 北勢バイパス建設予定地内(四日市市)遺跡位置図(1:50,000)【国土地理院 桑名・四日市より】

	No.	ふりがな 遺跡名	遺跡番号	所在地	面積 (m <sup>2</sup> )	時期	遺物
第1工区	1	じほうちの 406 四方天道跡	大矢知町	10,800	古墳～鎌倉	灰釉陶器・山茶椀・土師器	
	2	したのべ 497 四反田遺跡	大矢知町	12,000	古墳～鎌倉	土師器・須恵器・山茶椀	
	3	くろべ 54 久留宿遺跡	大矢知町	46,500	弥生～震町	弥生土器・石斧・須恵器・山茶椀	
	4	ほくひの 305 北之瀬遺跡	大矢知町	15,600	古墳	土師器・須恵器	
	5	ほづら 336 羽津広遺跡	大矢知町	15,400	弥生	弥生土器	
	6	よまとが 84 山奥遺跡	大学羽津	11,000	弥生～古墳	弥生土器・須恵器	
第2工区	7	せらわだい 82-83 寺谷古墳群	垂板町	6,500	古墳	須恵器	
	8	ねとたのく 382 名戸谷口古窯跡	山之一色町	11,000	古墳	須恵器・灰原	
	9	あらひだ 121 荒井田遺跡	山之一色町	10,500	弥生	弥生土器	
	10	かわらや 406 川原宮遺跡	西坂部町	19,600	古墳～	土師器・須恵器・山茶椀	
	11	かわらひや 347 川向山遺跡	西坂部町	4,900	古墳	土師器・須恵器・山茶椀	
	12	えだのく 259 江田川遺跡	西坂部町	9,100	古墳	土師器・須恵器・灰釉陶器	
	13	えこだに 120 横谷遺跡	西坂部町	12,000	弥生	石器・弥生土器・土師器・須恵器	
	14	おがくもんぐん 499 東門田遺跡	曾井町	11,000	古墳～	須恵器	
	15	こし 282 小生遺跡	小生町	5,640	古墳～	土師器・須恵器	
	16	じょくす 149 生泉遺跡	小生町		古墳～	土師器・須恵器・山茶椀	
	17	ひととま 421 里前遺跡	八王子町	11,570	弥生～	弥生土器・土師器	
	18	ひじのく 360 辻ノ木遺跡	波木町	12,720	古墳～	須恵器	
	19	しうらうだい 569 菖蒲山遺跡	北小松町	7,320	古墳～	須恵器・土師器	
	20	せきどく 301 山柄遺跡	北小松町	1,930	古墳～	土師器・須恵器・山茶椀	
	21	どうぎく 209 道嶺遺跡	北小松町	13,240	古墳～	須恵器	
	22	みずのく 283 木ノ木遺跡	南小松町	1,930	弥生～古墳	弥生土器・須恵器	
	23	おおひらく 450 大垣外古墳群(大垣外古墳群を含む)	南小松町	15,590	弥生～震町	弥生土器・土師器・須恵器・埴輪	
合計			265,840				

表1 表 北勢バイパス建設予定地内(四日市市)遺跡一覧表

※面積は事業地にかかる道路の部分を示す。

※網掛街は令和3年度までに調査が完了したもの。

## II 位置と環境

川向山遺跡と江田川遺跡周辺の地理的・歴史的な環境を通観してみたい。文章中の番号は第2図の番号に対応している。

### 1. 地理的環境

川向山遺跡(1)と江田川遺跡(2)は、四日市市西部の西坂部町に所在し、海蔵川と江田川に挟まれた御館台地の東端にある遺跡である。台地の中央を東西に横切る県道田光・四日市線の北側が川向山遺跡、南側が江田川遺跡となっているが、既往の調査から古墳時代後期を中心とする一連の遺跡であると考えられている。横谷遺跡(3)も同じく西部の西坂部町に所在し、江田川右岸の丘陵北端に立地する縄文時代及び古墳時代の遺跡である(第2図・第3図)。

海蔵川や江田川をはじめ、市域を流れる河川は鈴鹿山脈に源を発し、東流して伊勢湾に注ぐ。

市内では、東部の海岸平野を東海道が南北に通っている。途中の日置追で参宮道は分岐し、伊勢神宮へ向かう。伊勢湾に面する湊かは、対岸の三河や美濃に通じ、外海へ出て東国とも交易が行われた。鈴鹿山脈の八風越えや千種越えによって、近江を通過する東山道と繋がり、京と東国を結ぶ交通の要衝となっている。

### 2. 歴史的環境

#### 旧石器時代

四日市市周辺では、ナイフ型石器の出土する遺跡がいくつか知られている。内部川・鎌谷川流域に属する内戸谷B遺跡や宮藏遺跡などの市域南部のグループと、朝明城城下の久留倍遺跡(4)及び、削器・剥片のみの発見であるが当時代に属する可能性がある野呂田遺跡(5)などを含む市域北部のグループである。川原宮遺跡近傍では旧石器の出土は確認されていない。

#### 縄文時代

縄文時代草創期に属するものとしては東北山A遺跡(6)など、有耳尖頭器が出土した遺跡が鈴鹿山麓扇状地の台地上に多数確認されている。早期の遺跡は、中野山遺跡(7)で縄文早期の櫛状火炉穴が多数検出されたほか、内部川流域の一色山遺跡で押型文土器が出土している。このほかに発掘調査で構造が確認されている例を挙げると、東日町遺跡(8)や小牧山遺跡(9)で

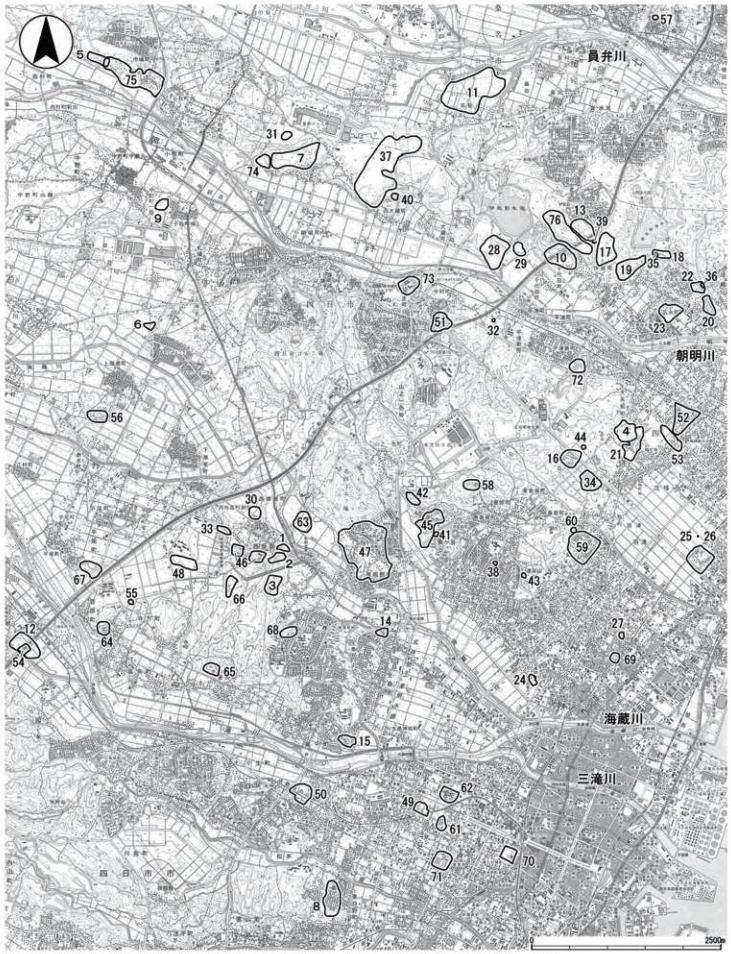
堅穴住居で、西ヶ広遺跡(10)で縄文中期後葉の土坑とその中から深鉢が、土手遺跡(12)や桑名市志知南浦遺跡(11)やといった沖積地で縄文晩期の突竪文土器が、伊坂遺跡(13)で狩猟用の陷阱穴が検出されており、徐々に様相が明らかになりつつある。

#### 弥生時代

弥生時代になると、まず前期には海蔵川と三滝川に挟まれた生桑丘陵上に、いずれも多重環濠をもつ大谷遺跡(14)、水井遺跡(15)などの集落が営まれる。中期ないし後期に入ると大谷遺跡、永井遺跡も継続して営まれるが、そのほかの地域でも遺跡数が躍進的に増加し、海岸部から内陸部に広く分布が見られるようになる。

久留宿遺跡(4)では中期から後期にかけての堅穴住居のほか、方形周溝墓が確認され、流路からは多くの土器・木製品が出土した。特に後期になると遺構数が飛躍的に増加する。これと時期を同じくして、久留倍遺跡南西の丘陵上に立地する山奥遺跡(16)で県下有数の大規模な集落が営まれる。土製模造鏡や多数の鉄製品などの遺物があり、注目される。このほか中野山遺跡でも集落が確認されている。菟上遺跡(17)では中期後葉に大規模な集落が形成される。後期になると菟上遺跡と一つ西側に谷を隔てた西ヶ広遺跡(10)が中心的集落となる。一方で東方の丘陵頂部に営まれた金塚遺跡(18)では環濠を持つ高地性集落が営まれ、山村遺跡(19)では環濠が確認されている。低地部では、辻子遺跡(20)で中期後葉から後期の集落及び水田が確認されている。墓域としては、久留倍遺跡及びこれまでに隣接する大矢知山遺跡(21)で方形周溝墓が検出されたほか、山村遺跡でも方形周溝墓が20基検出されている。他に菟上遺跡や広永城跡(22)、間ノ田遺跡(23)でも方形周溝墓が確認されている。このほか、金塚遺跡では縄文式土器である銅鐸破片が、伊坂遺跡では江戸時代に扁平拙式土器・棒文土器が出土している。

南の海蔵川北岸の上野山遺跡(24)でも中期後葉の集落跡と方形周溝墓が確認されている。川向山遺跡(1)近くでは横谷遺跡(3)が弥生時代の遺跡として登録されているが、平成29年の発掘調査では当該期の遺物は出土していない。



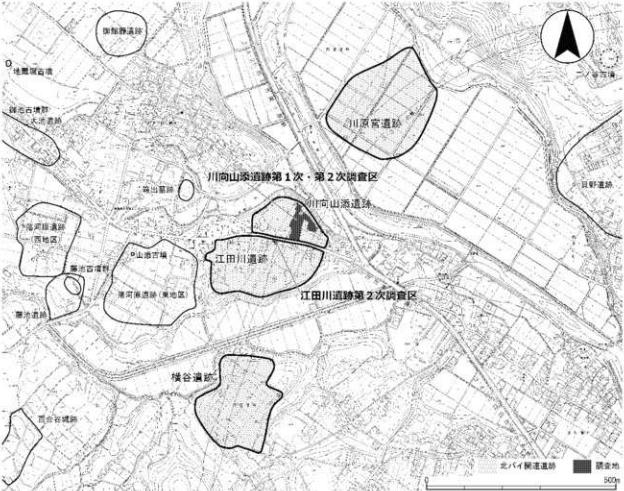
#### 古墳時代

古墳時代前期に入ると、久留佐遺跡(4)や上野遺跡(24)でまとまった集落が見られるようになる。また、海岸に近い茂福城跡(25)の下層で確認された里之内遺跡(26)ではS字形口縁柱付甕が出土しており、この時期に海岸低地への進出が始まったものと見られる。周辺の前期古墳は、内行花文鏡や車輪石・勾玉などが出土した志氏神社古墳(27)があるほか、員弁川水系では三角縁神獣鏡が出土した可能性がある桑名市の御塙山古墳が発見される程度である。しかし、菟上遺跡(17)では滑石合子型石製品の蓋が出土し、伊坂遺跡(13)では勾玉や菅冠が出土していることから、他にも消滅した古墳が存在した可能性もある。中期古墳としては、方墳を主体とする広古墳群(28)や、その東側にあって同じく方墳の可能性が指摘されている浄ヶ谷古墳群(29)がある。後期に入ると、遺跡数が爆発的に増加する。中野山遺跡では前期から続いて集落が営まれる。垂坂丘陵東部地域では、一旦断絶していた山奥遺跡で再び集落が営まれるようになる。海藏川流域では、江田川遺跡(2)のほか、川向山添遺跡(1)、御館野遺跡

(30)でも後期の集落が確認されている。

古墳は、特に7世紀以降に小規模な群集墳が多く築造される。筆ヶ崎古墳群(31)や八幡古墳(32)、御池古墳群(33)のように横穴式石室を主体とする古墳がある一方、死人谷横穴墓群(34)や金塚横穴墓群(35)、朝日町の広水横穴墓群(36)のように横穴墓も多數見られ、その導入の背景が注目される。また、北山C遺跡(37)では多数の方墳からなる大規模な群集墳が確認されている。このほか、所属時期は明確ではないが、鈴木敏雄氏の記述によれば御池古墳群東側の丘陵上に「大塚」と称される前方後円墳が1基存在したことされる。

生糸遺跡としては垂坂丘陵や朝日丘陵周辺に、まず5世紀後半に小杉大谷古窯跡(38)が築かれ、その後、伊坂窯跡(39)、北ノ山古窯跡(40)、西ヶ谷古窯跡(41)、名戸谷口古窯跡(42)、垂坂古窯跡(43)、場浦古窯跡(44)など古墳時代中期から奈良時代にかけて須恵器窯が築かれた。西ヶ谷古窯跡に隣接する西ヶ谷遺跡(45)は、出土遺物からその生産活動に関わっていた集落と考えられる。土師器焼成坑については、山奥遺跡西ヶ谷遺跡、落河原遺跡(46)、久留佐遺跡で確認されている。



## 飛鳥～奈良時代

横谷遺跡の所在する坂町部は、『倭名類聚録』(和名抄)に見える、古代三重郡の刑部郷に相当すると考えられている。刑部郷内に属すると考えられる当該期の主要遺跡は、貝野遺跡(47)、江田川遺跡、落河原遺跡、上ヶ谷遺跡(48)などがある。特に貝野遺跡では、やや整然さを欠くが、古代の掘立柱建物が多数検出されているほか、暗文土師器がまとまって出土しており、遺跡の構造から考えても都内の中心的な集落であったと考えられる。落河原遺跡では石帯が出土しており、官人の存在をうかがわせる。

また、近隣の朝明川流域を中心とする古代朝明郡に関わると思われる発掘調査成果が近年相次いでおり、今後の研究で大きな期待が持たれる。久留倍遺跡では東向きの正殿や八脚門等の施設、大規模な東西棟の掘立柱建物等が検出された。また溝で方形に区画された内側に整然と並ぶ柱立建物が確認され、朝明郡の正倉院跡と推測されている。一方、西ヶ谷遺跡で確認された、奈良時代に計画的に配置された大型の掘立柱建物群は、官衙に隣接する可能性が高い建物群である。谷を隔てた丘陵上に広がる菟上遺跡では、西ヶ谷遺跡より古い柱立建物群が見つかっている。このほか、宮の西面跡(49)では石帶や木軒が、落河原遺跡や前山遺跡(50)では石帯が出土している。対して、山村遺跡、中村遺跡(51)、貝野遺跡などはこの時期の一般的な集落と思われる遺跡である。久留倍遺跡東方の下之宮遺跡(52)、下之宮南遺跡(53)は、低地部の集落遺跡と考えられる。中野山遺跡や筆ヶ崎古墳群の周辺では、多くの建物跡が見つかり、筆ヶ崎古墳群では鉄器加工に関係する構造や遺物が検出されていることから、当地の古代郷名である大羅郷との関係が考えられる。

古代三重郡で確認されている古代の寺院としては、智積町の智積魔寺(54)がある。昭和41年の発掘調査で金堂、講堂、僧坊が確認されている。瓦は、川原寺式のものが含まれ、寺方町の北瀬古窯跡群(55)から供給を受けたと考えられている。岡山古窯跡群(56)は、古墳時代後期から営まれている窯であるが、奈良時代には既など官衙や寺院との関わりが考えられる器種を焼成している。さらに広域に目を向けると、塔心磚から唐三彩の蓋をもつ利便容器が出土した朝日町の經生廬寺があり、また桑名市の額田庵寺(57)では飛鳥川廻寺と

同名の軒丸瓦が出土している。西ヶ谷遺跡や伊坂遺跡ではまとまった量の瓦が出土し、前者は小規模な堂の存在が、後者は瓦窯の存在が想定される。そのほか、上ヶ谷遺跡では布目瓦が集中して散布する一角があり、その性格が注目される。

## 平安時代

平安前期には久留倍遺跡で引き続き正倉が建てられている。近接する大矢知山畠遺跡は豊富な綠釉陶器などの出土遺物から有力者の居館か寺院関連の遺跡とみられる。当時、当地域に大きな影響を及ぼしたと思われる的是、10世紀前葉に建立され現在も信仰を集める垂坂山觀音寺(58)である。大膳寺跡(59)もその末寺の一つと伝わり、発掘調査で土馬や大量の瓦が出土しているが、遺物の時期は觀音寺建立より古い。この近隣にある大谷瓦窯跡(60)は、大膳寺跡へ瓦を供給した瓦窯である。上野遺跡では人名の墨書き灰釉陶器が出土している。

## 中世

律令の支配体制の崩壊に伴い、北勢地方の員弁郡・三重郡・朝明郡の三郡は相次いで伊勢神宮に寄進されて神都となり、神宮の莊園である御園・御厨・納所がたてられた。これらの庄園と間わりがあると考えられる遺跡としては、宮ノ前遺跡がある。これは古代から続く遺跡で、出土した木簡から古代佐田郡の一部であることが知られるが、墨書き土器をはじめとする中世の遺物も豊富に出土しており、近隣の芝田遺跡(61)・小判田遺跡(62)などとともに当地周辺に比定される飯倉御厨の一角と考えられる。辻子遺跡は、多数の墨書き土器や灰釉陶器などの出土遺物から、古代末期に朝明郡が神宮に寄進された後にこの周辺に所在した弘永御厨の中心城と推定されている。久留倍遺跡では中世の遺構・遺物も多く、掘立柱建物、井戸、溝、区画溝を伴う塙墓、火葬墓等を確認した。菟上遺跡では中世前期の集落と中世後期の大火葬墓群が見つかった。上野遺跡は区画溝と掘立柱建物が確認され、貴重な中世の集落資料となっている。川原宮遺跡(63)では、低地部における小集落とともに地盤痕跡も確認されている。

城跡について見ると、本遺跡周辺には1204年の三日平氏の乱に関係すると見られる高角城跡(64)・曾井城跡(65)があるが、いずれも明確な構造は見られない。ほかに、百合谷城跡(66)、平尾城跡(67)、坂部城跡(68)、羽津城跡(69)がある。このうち、平尾城跡は

1993年に発掘調査が行われている。さらに平野部に目を向けると度茂城跡(25)・浜田城跡(70)、赤堀城跡(71)がある。これらは地割や現存構造から繩張りの復元が試みられており、赤堀城跡は現在までに5次にわたる発掘調査が行われ、土黒などの遺構が検出されている。朝明川流域では、大矢知城跡(72)・萱生城跡(73)・北山城跡(74)・市場城跡(75)などがあり、中でも伊坂城跡(76)は、近年の発掘調査で防御性の高い繩張りや礎石を有する巨大な構築が検出され、16世紀代の当地域における城づくりの最高到達点と評価されている。

## 【主要参考文献】

### ●四日市市

『四日市市史 第一巻 史料編 自然』1990、『考古I』1988、『考古II』1993、『古代・中世』1991

### ●四日市市教育委員会

『大谷遺跡発掘調査報告－A地区、B地区－』1966、『大谷遺跡発掘調査報告II－C地区的構造－』1976、『大谷遺跡発掘調査報告III－C地区的遺物－』1977  
『西ヶ谷遺跡発掘調査報告－D地区－』1972  
『永井遺跡発掘調査報告』1973  
『四日市市後宮古跡』1973  
『大膳寺跡』1978・1979・1980・1981・1982  
『西ヶ谷遺跡』2002、『西ヶ谷遺跡4』2002、『西ヶ谷遺跡5』2005

### ●大矢知山畠遺跡

『山奥遺跡I』2003、『山奥遺跡II』2004  
『久留倍遺跡5』2013、『久留倍遺跡6』2013

### ●川原宮遺跡

### ●江田川遺跡

### ●横谷遺跡

### ●四日市市遺跡調査会

『上野遺跡』1991、『上野遺跡2』1992  
『西ヶ谷遺跡』1996

### ●朝日町教育委員会

### 『經生廬寺跡発掘調査報告』1988

### ●朝日町

### 『みえあさひ文化財マップ』1999

### ●三重県文化財連盟

### 『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』1970

### ●三重県埋蔵文化財センター

『金珠遺跡・金塚横穴墓群・山村遺跡発掘調査報告』2002

『伊坂城跡発掘調査報告』2003、『伊坂遺跡発掘調査報告』2004  
『山村遺跡(第2次)発掘調査報告』2004

『辻子遺跡発掘調査報告』2004  
『辻子遺跡(第4次)発掘調査報告』2005  
『萱上遺跡発掘調査報告』2005

『広永横穴墓群・広永1号墳・広永城跡・広永遺跡発掘調査報告』2006  
『西ヶ谷遺跡(第3・4次)発掘調査報告』2006  
『志知南浦遺跡発掘調査報告』2008  
『中野山遺跡(第2・3・6・7次)発掘調査報告』2016

『中野山遺跡(第4・5・8~13次)発掘調査報告』2022

『中野山遺跡

『筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡(第4・5・7次)発掘調査報告』2019  
『筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡(第2・3・6次)発掘調査報告』2021

『北山城跡(第2~7次)・西山古墳群 発掘調査報告』2020  
『居林遺跡・北山城跡(第2~4次)発掘調査報告』2022

### III 川向山添遺跡の調査成果

#### 1. 調査の方法

##### (1)調査区の設定

川向山添遺跡の調査区は、一次調査(第4図)の結果、要二次調査範囲とされた北勢バイパス用地にかかる部分に設定した。

##### (2)小地区の設定

調査区の設定後、調査区全体にわたって国土座標に合わせた4m四方の小地区を設定した。各小地区には、西から東へ向かってAから順にアルファベットを、北から南へ向かって1から順に数字を付与し、このアルファベットと数字の組み合わせにより各小地区を示した(第5図)。遺構検出段階における遺物の出土

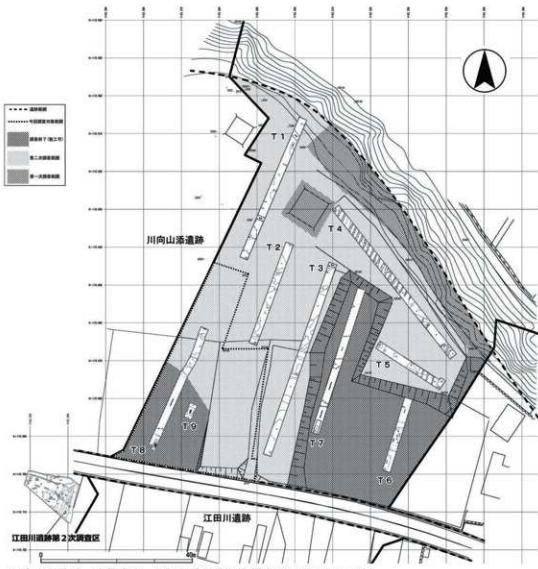
位置の記録は、小地区ごとに行つた。

##### (3)掘削

現地調査での掘削作業については、まず表土を重機で除去した。その後、人力により包含解剖削と遺構検出作業を行い、検出した各遺構をさらに人力で掘削した。

##### (4)遺構番号の付与

遺構番号は、ピット以外の遺構は全て通し番号とし、表記時に番号の前にSK、SDなど遺構の種類ごとの略称を付した。ピットは、小地区ごとに地区名を冠した通し番号を付した。



第4図 川向山添遺跡一次調査区・江田川遺跡第2次調査区配置図(1:1,000)



第5図 川向山添遺跡遺構配置図(1:500)

## 2. 基本層位

調査の結果確認された基本層位は、上から①暗褐色土(表土・耕作土)、②褐色土は黒褐色(包含層)、③褐色土(地山)となっており、③層の上面を検出面とした。さらに③層の下は、褐色砂礫層及びない黄褐色砂礫層となっており、深く掘り込まれた遺構の底部などに見られる。このほか、A地区の北部やC地区の南部では、土壤改良のために重機によって遺構面近くまで一度表土を除去し、砂利を十数センチの厚さで敷いた後、表土を戻す工事を行っていたことが分かった。このため、破壊を免れた遺構と擾乱が複数に入り組んでおり、人力での検出手作業に手間取ることになった。C地区西部で調査前から把握していた3基の大型土坑は、この工事に伴う砂利採取によるものであることが判明したため、完掘はしていない。

## 3. 遺構

### (1) 穴式住居

A地区で4棟、B地区で12棟、C地区で5棟の計21棟を確認した。大半の住居では、北側あるいは北西に向いた壁の中央にカマドが設けられていた。カマドの周辺では、使用されていた土器が多数出土した。なお、図中に示した遺物の番号は遺物実測図(第27~29図)と対応している。

**S H 1 (第8図)** A地区南端部で検出した古墳時代後期の穴式住居である。東西4.0m、南北2.2mで北辺の中央にカマドがあり、床面には貼床が認められる。検出手面からの深さは貼床までが0.1m、加工面までが0.2m前後である。一部が鉄塔の土塚・土坑で破壊されている以外は住居本体とカマドの遺存状態が良好であり、周溝は全周にあり、主柱穴は直径0.4~0.5mのものを4箇所確認した。出土遺物は土師器甕、須恵器、焼塊がある。

**S H 2・39・40(第9図)** A地区東部で検出した古墳時代後期の穴式住居である。北辺に設けられたカマドの遺存状態が比較的良好であり、これに隣接する位置で、並行する穴式住居S H 39のカマドも一部残存していた。床面には貼床が認められる。検出手面からの深さは貼床までが0.15m、加工面までが0.25m前後である。主柱穴の検出手況からは、まさかH 2の東角位置を起點とし、一辺4.2m程度のS H 39が造られた後、さらに北西・南西方に1m程度拡張したS H 2が造られた。

さらにもS H 2も主柱のみを一同建て替えたと考えられ、これをS H 40とした。主柱穴は直径0.4~0.6mのものの1箇所を確認したが、西隅のものは重複により一回り大きい。出土遺物は土師器甕、須恵器がある。

**S H 8(第10図)** B地区東部で検出した古墳時代後期の穴式住居である。東西3.7m、南北4.0mで検出手面からの深さは0.2m前後である。周溝は全周にあり、主柱穴は直径0.4mのものを4箇所確認した。北辺の中央にカマドがあり、出土遺物は土師器甕、須恵器などがある。

**S H 9(第10図)** S H 8と重複する古墳時代後期の堅穴住居である。S H 8より古く、東西4.5m、南北3.9mで検出手面からの深さは0.2m前後である。周溝・主柱穴ともに確認できなかった。出土遺物は土師器がある。

**S H 10(第11図)** B地区中央部で検出した古墳時代後期の堅穴住居である。東西6.5m、南北6.7mで検出手面からの深さは0.2m前後である。周溝はないが、幅1m前後の浅い掘り込みが壁に沿って巡っている。主柱穴は直径0.5mのものを4箇所確認した。北辺の中央にカマドがあり、出土遺物は土師器甕、須恵器がある。

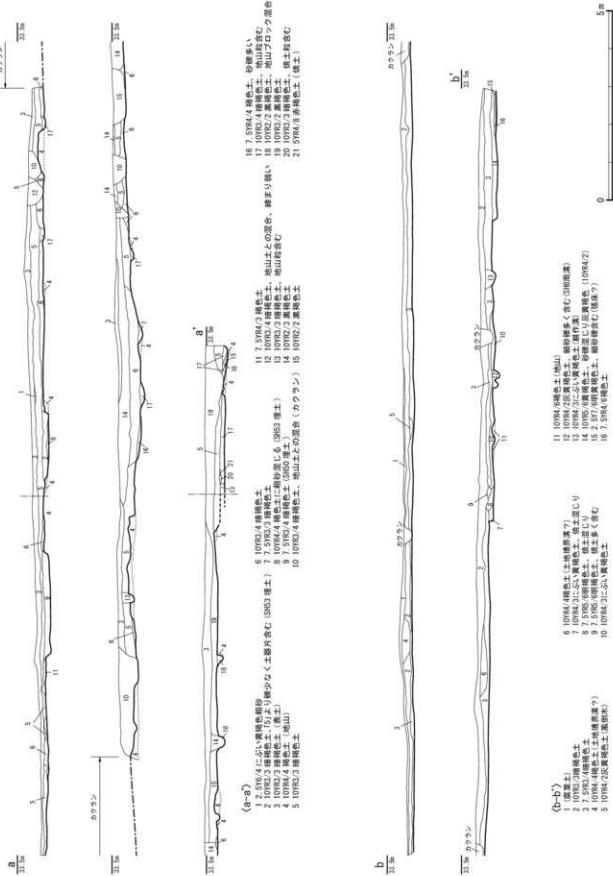
**S H 11(第11図)** S H 10と重複する古墳時代後期の堅穴住居である。S H 10より古く、東西4.1m、南北4.5mで検出手面からの深さは0.25m前後である。周溝はないが、主柱穴は直径0.4~0.5mのものを4箇所確認した。北辺の中央にカマドがあり、出土遺物は土師器甕、須恵器がある。

**S H 13(第13図)** B地区中央部で検出した古墳時代後期の堅穴住居である。東西7.8m、南北6.8m以上で、これまでり新しいS H 19も東西7.3mの規模がある。周溝は北と東側に部分的に確認できたのみで、主柱穴は直径0.4~0.5mのものを4箇所確認した。北辺の中央にカマドがあり、煙道も確認できた。出土遺物は土師器甕、須恵器がある。

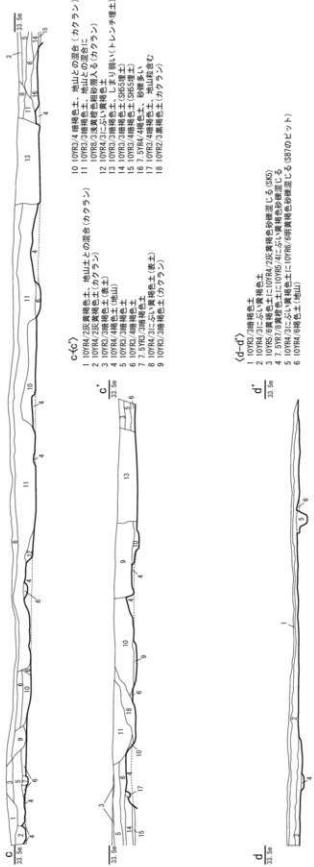
B地区的南部では、このような比較的大型の堅穴住居が重複して建てられている。

**S H 14(第12図)** B地区中央部で検出した古墳時代後期の堅穴住居である。重複するS H 15より古く、S H 13より新しい。東西2.2m、南北4.6mで検出手面からの深さは0.2m前後である。周溝はない、主柱穴は直径0.3~0.5mのものを4箇所確認した。北辺の中央にカマドがあり、出土遺物は土師器甕、須恵器がある。

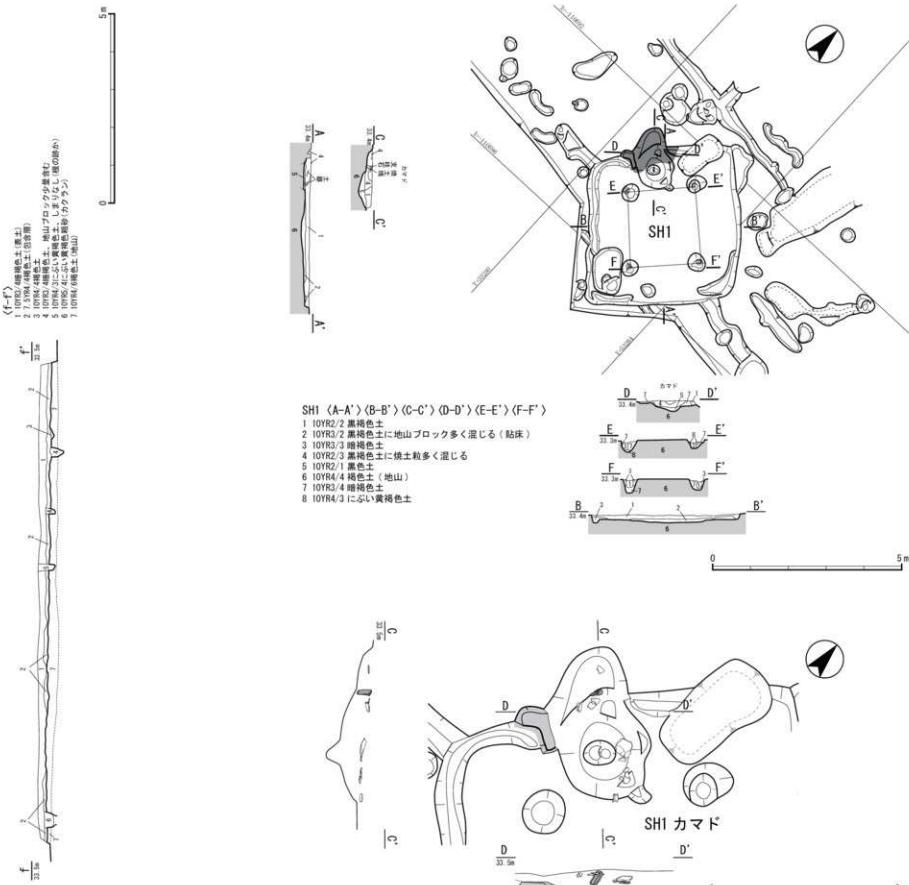
**S H 15(第12図)** B地区中央部で検出した古墳時代



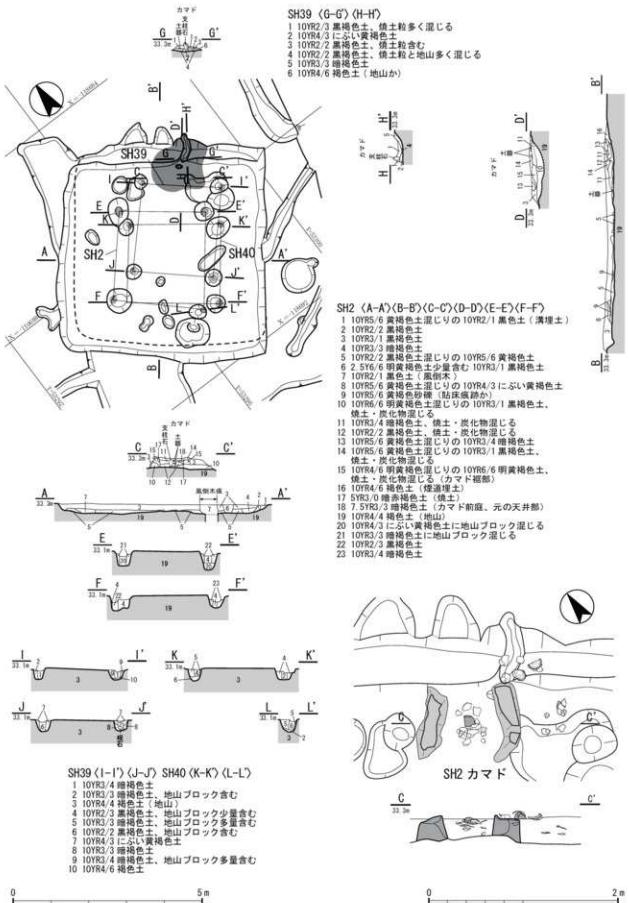
第6図 川向山添遺跡土層断面図① a-a', b-b', c-c', d-d', e-e' (1:100)



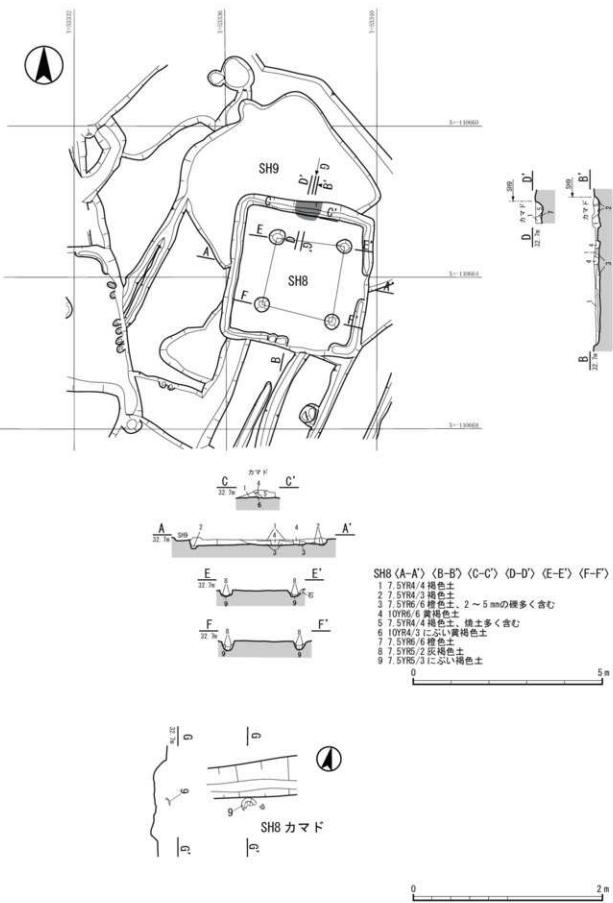
第7図 川向山添遺跡土層断面図② c-c' ,d-d' ,e-e' ,f-f' (1:100)



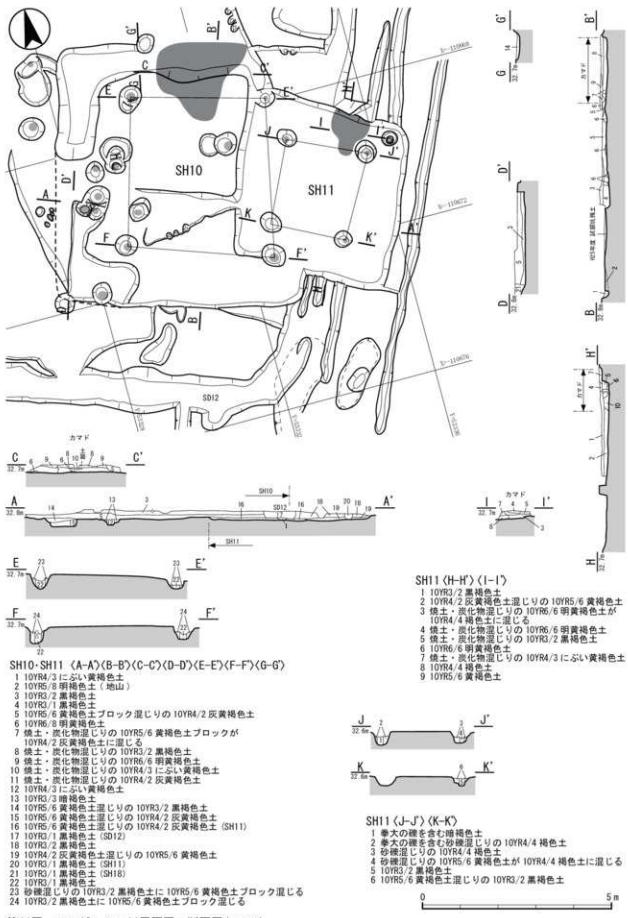
第8図 SH1 平面図・断面図(1:100)、SH1 遺物出土状況図(1:40)



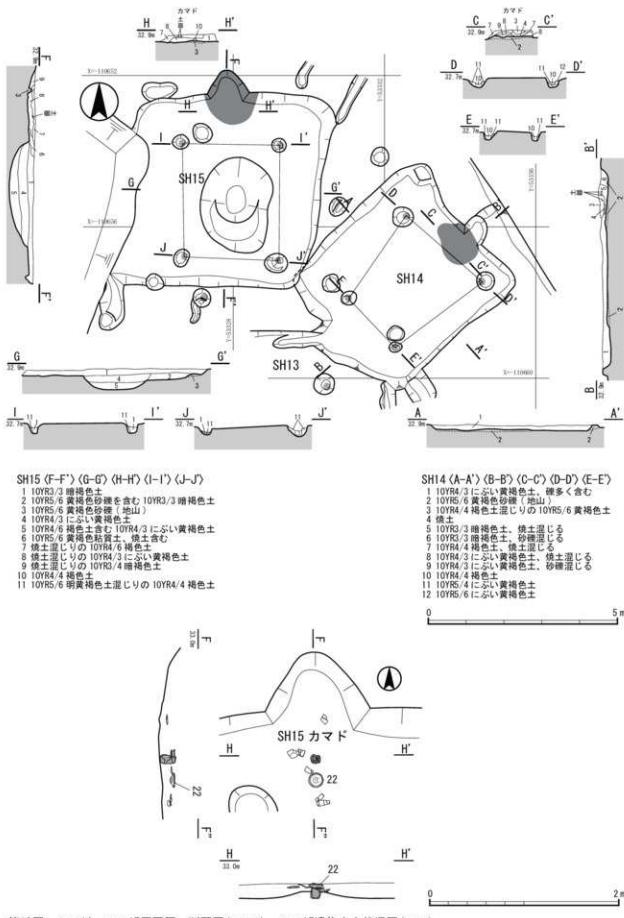
第9図 SH2・SH39・SH40平面図・断面図(1:100)、SH2遺物出土状況図(1:40)



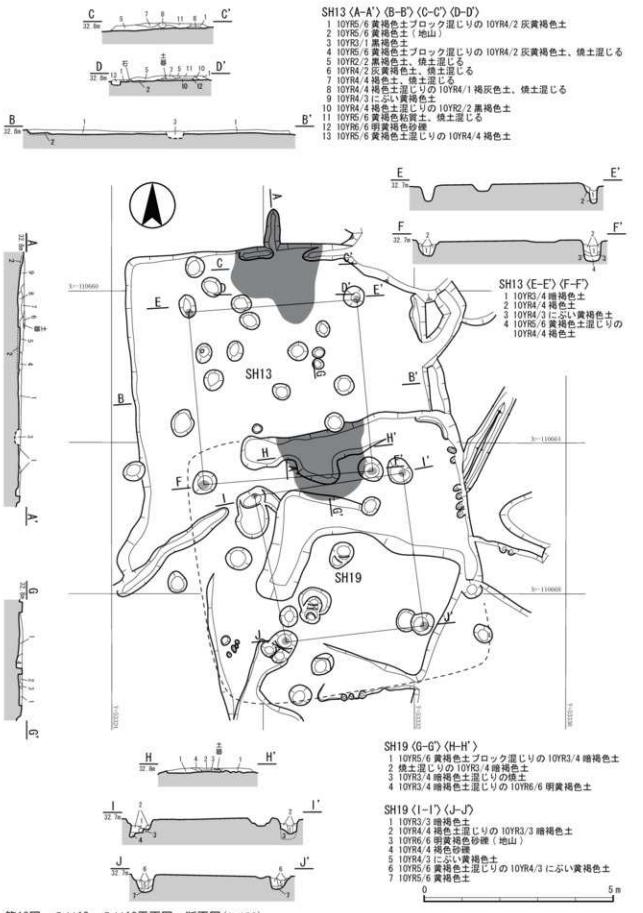
第10図 SH8・SH9平面図・断面図(1:100)、SH8遺物出土状況図(1:40)



第11図 SH10・SH11平面図・断面図(1:100)



第12図 SH14・SH15平面図・断面図(1:100)、SH15遺物出土状況図(1:40)



第132図 SH13・SH19平面図・断面図(1:100)

後期の堅穴住居である。重複するSH14より新しい。東西5.3m、南北2.5mで検出面からの深さは0.15m前後である。周溝はなく、主柱穴は直径0.4~0.6mのものを4箇所確認した。床面中央部に東西1.9m、南北2.5m、床面からの深さ0.5mの中央土坑があるが、用途は不明である。断面観察では床面の下になることから、少なくとも住居の廃絶前に掘削し、埋め戻しているようである。近隣での類似の構造は、中野山遺跡のSH304やSH386が代表的な例である。北辺の中央にカマドがあり、この内部から須恵器有蓋高杯の杯部(22)が口縁部を上にした状態で出土した。被熱していることから火鉢として用いられたものと考えられる。出土遺物は土師器、須恵器、焼土塊がある。

**S H18 (第14回)** B地区中央部で検出した古墳時代後期の堅穴住居である。重複するSH19・SH20より新しく、SH10より古い。東西6.6m、南北6.5mで検出面からの深さは0.15m前後である。周溝は北辺の一部で検出し、主柱穴は直径0.5~0.7mのものを4箇所確認した。北辺の中央にカマドがあり、出土遺物は土師器、須恵器がある。

**S H19 (第13回)** B地区中央部で検出した古墳時代後期の堅穴住居である。重複するSH13より新しく、S H18・SH10より古い。東西7.4m、南北7.2mで検出面からの深さは0.15m前後である。周溝は北辺の一部で検出し、主柱穴は直径0.5~0.6mのものを4箇所確認した。北辺の中央にカマドがあり、出土遺物は土師器、須恵器がある。

**S H20 (第14回)** B地区中央部で検出した古墳時代後期の堅穴住居である。重複するSH18・SH10より古い。東西6.0m、南北2.1m以上で、検出面からの深さは0.1m前後である。周溝はなく主柱穴は直径0.5mのものを4箇所確認した。柱穴の状況から、南北幅も復元で6.0m程度と考えられる。カマドはS H18に削平されており、出土遺物もない。

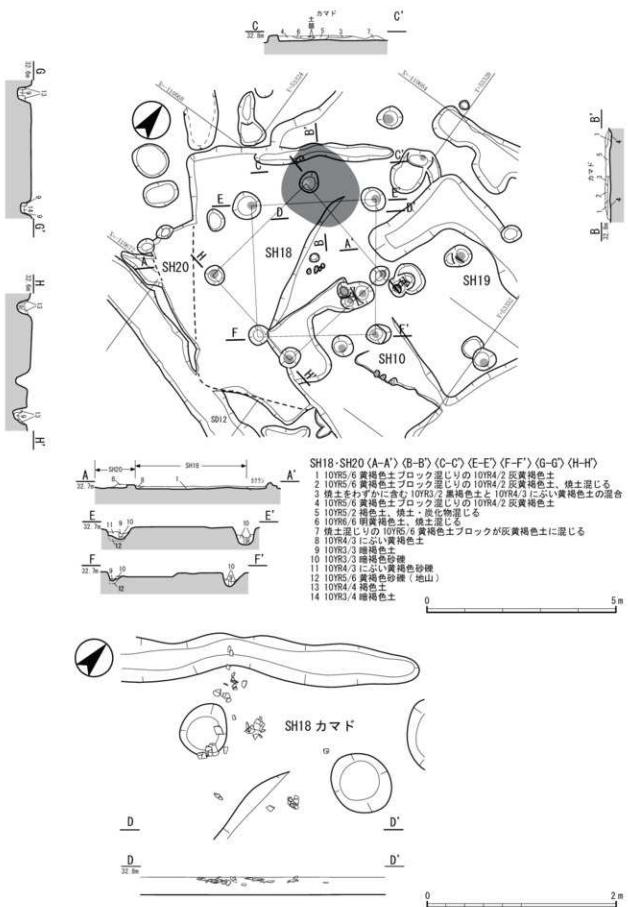
**S H21 (第15回)** B地区北部で検出した古墳時代後期と考えられる堅穴住居で、南半の大部分が砂土採取で滅失している。東西6.0m、南北2.5m以上で検出面からの深さは0.15m前後である。主柱穴は直径0.3mのものを1箇所確認した。カマドは確認できなかった。出土遺物は土師器がある。

**S H35 (第15回)** A地区南東部で検出した古墳時代後期の堅穴住居である。土砂採取で大部分が滅失しているが、カマドの両袖部が確認でき、中央に支柱石が立てられた状態で出土した。土師器甕を中心とする多くの遺物はこの周辺から出土したほか、カマド東側の周溝上で須恵器杯身(28)が出土した。現存部は東西5.7m、南北2.5mで、検出面からの深さは2m前後である。周溝は北・西にあり、主柱穴は削平で確認できなかった。カマド位置を北壁塀の中央とすると、東西幅は7.2m程度となり、SH19と近い規模になると考えられる。

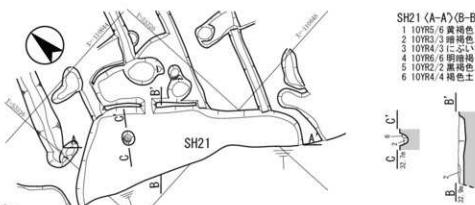
**S H50 (第16回)** C地区東側で検出した古墳時代後期の堅穴住居である。北西からカマド付近にかけて南北5.0m、東西2.8mの範囲が残存しているものは土砂採取で滅失している。検出面からの深さは0.25mで主柱穴は直径0.4mのものを1つ確認した。カマドは北辺にあり、カマドを北壁中央の位置と仮定すれば、東西幅は7.0m程度に復元でき、本遺跡の堅穴住居としては大型のものとなる。この住居より古い掘立柱建物S B70が同位置にあり、柱穴の1つをカド下から検出された。出土遺物は土師器甕、須恵器、焼土塊がある。

**S H53 (第17回)** C地区東側で検出した生存状態が比較的良好な古墳時代後期の堅穴住居である。SH50の南西側にあり、東西6.5m、南北6.1mで、床面には貼床が認められる。検出面からの深さは貼床までが0.12m、加工面までが0.16m前後である。周溝はほぼ全周に見られ、主柱穴は直径0.4~0.5mのものを4つを確認した。北角に貯蔵穴と考えられるSK54がある。西側に世の掘立柱建物B 66が重複する。出土遺物は土師器甕、須恵器がある。

**S H55 (第18回)** C地区中央部で検出した古墳時代後期の堅穴住居である。SH53の西側、SH57の南東側にあり、SH57より新しい。東西6.5m、南北推定6.3mで、西側の一部が一次調査の際のトレチエ削平されている。カマドは現存しないが、一次調査時には北壁中央付近で燒土を確認している。北角に貯蔵穴と考えられるSK61がある。床面には貼床が認められる。検出面からの深さは貼床まで0.1m、加工面までが0.15m前後である。西側以外の壁に部分的に見られ、主柱穴は直径0.4~0.5mのものを4つ確認した。西側に時期不明の掘立柱建物S B65が重複する。前後関係は、S B65のほうが古いと考えられるが、埋土の色が近似しているため検出段階で明確な結論が得出せなかつた。出土遺物は土師器甕、須恵器、焼土塊がある。



第14図 SH18・SH20平面図・断面図(1:100)、SH18遺物出土状況図(1:40)



第15図 SH21・SH35平面図・断面図(1:100)、SH35遺物出土状況図(1:40)

**S H57(第19図)** C地区中央部で検出した古墳時代後期の堅穴住居である。SH55の北西側にあり、SH55より古い。東西7.5m、南北2.3mで、本遺跡の堅穴住居では2番目の規模である。南側の一部が攪乱で削平されている。床面には貼床が認められ、検出面からの深さは貼床まで約0.12m、加工面までが0.15m前後である。周溝は南側を除く全周にある。カマドは良好に残存し、北角に貯蔵穴と考えられるSK58がある。主柱穴は直径0.4m～0.7mのもの10個を確認した。主柱穴の状況から、2回の建て替えがあったと考えられる。出土遺物は土器類、須恵器、焼土塊がある。

**S H62(第17図)** C地区東側で検出した古墳時代後期の堅穴住居である。東西6.0m、南北5.1mで、本遺跡では比較的小型のものである。床面には貼床が認められ、検出面からの深さは貼床まで約0.15m、加工面までが0.20m前後である。周溝はなく、主柱穴は直径0.3m～0.6mのもの4個を確認した。多くの住居が正方形に近い配置であるが、これは南北2.0m、東西3.1mの長方形となっている。中央付近が攪乱構で破壊されているが、その北側は比較的残存状態が良く、埋土か土器類(69)が伏せて置いてあり、その上には須恵器や蓋高杯(72)、さらにその上に土器師長胴甕(65・66)が載せられていたようである。

## (2)掘立柱建物

A地区2棟、B地区で4棟、C地区で5棟の計13棟を確認した。4棟が純柱建物であるほかは側柱建物である。配置状況は、一部に堅穴住居との重複があるが、基本的に堅穴住居の集中する場所を避けるような場所に建てられている。多くの掘立柱建物からは遺物が出土しておらず、所属時期が明確ではないが、配置状況からは、基本的に堅穴住居と同時期に存在したものと推定される。

**S B 6(第20図)** B地区東部でSB7・SK5と重複する位置において検出したもので、桁行3間(4.9m)、梁行2間(3.1m)の側柱建物である。柱穴は円形で埋土は暗褐色である。いずれの柱穴からも時期が分かれる遺物は出土していないが、古墳時代後期のSK5の底面から柱穴を検査していることから、これ以前の構造であることが分かる。

**S B 7(第20図)** B地区東部でSB6と重複する位置

において検出したもので、桁行4間(5.8m)、梁行3間(4.2m)の側柱建物である。西柱列は3間となり、やや弧状に配置される。柱穴は直径0.5～0.7mの円形で、埋土は黒褐色ないし暗褐色である。柱穴から時期が分かれる遺物は出土しておらず、SB6との柱穴の重複もないため前後関係は不明である。

**S B24(第21図)** B地区西部でSB25と重複する位置において検出したもので、桁行3間(4.7m)、梁行2間(1.8m)以上の側柱建物である。柱穴は円形で埋土は暗褐色である。柱穴から時期が分かれる遺物は出土しておらず、SB24との柱穴の重複もないため前後関係は不明である。

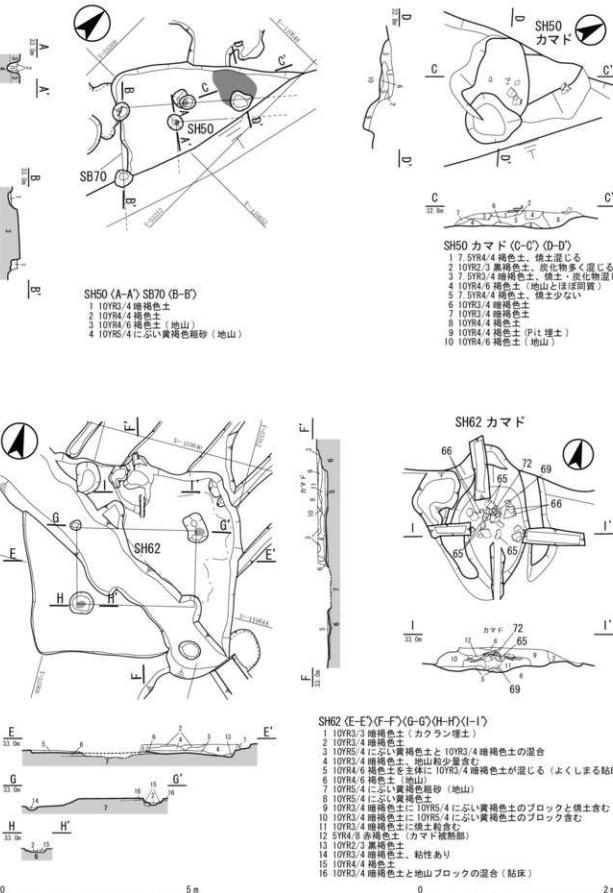
**S B25(第21図)** B地区西部でSB24とSH13に重複する位置において検出したもので、桁行6間(8.0m)、梁行4間(4.0m)以上の側柱建物である。東柱列はやや弧状に配置される。柱穴は直径0.5～0.6mの円形で、埋土は暗褐色である。柱穴から時期が分かれる遺物は出土しておらず、SB24との柱穴の重複もないため前後関係は不明である。

**S B27(第22図)** A地区南部で検出したもので、桁行4間(6.3m)、梁行2間(4.6m)の側柱建物である。柱穴は直径0.4～0.5mの円形で、埋土は黒褐色ないし暗褐色である。柱穴から時期が分かれる遺物は出土しておらず時期は不明である。

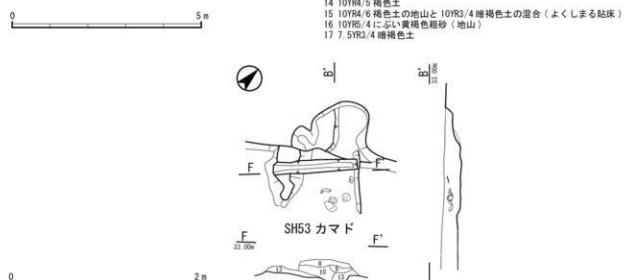
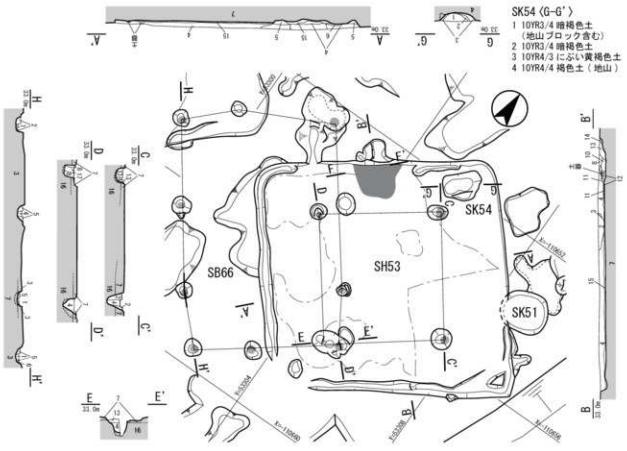
**S B36(第22図)** A地区北西部で検出したもので、桁行2間(3.5m)、梁行2間(3.3m)の純柱建物である。柱穴は直径0.4～0.5mの円形で、埋土は黒褐色ないし暗褐色である。柱穴から時期が分かれる遺物は出土しておらず時期は不明である。

**S B37(第23図)** A地区北西部で検出したもので、桁行2間(3.5m)、梁行2間(3.4m)の純柱建物である。柱穴は直径0.3～0.4mの円形で、埋土は暗褐色ないし暗褐色である。S B36と規模やプランが類似し、同時期の建物と考えられる。南西隅柱穴の重複状況から、S B38より古いことが分かる。柱穴から時期が分かれる遺物は出土しておらず時期は不明である。

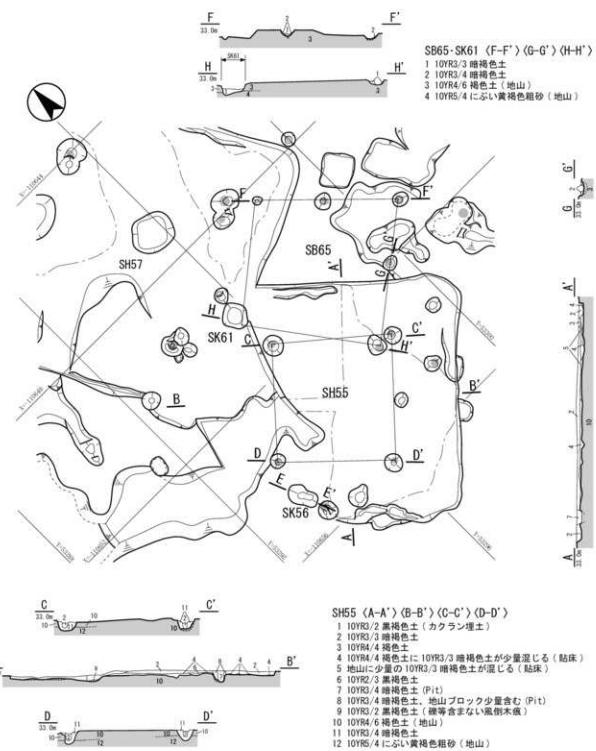
**S B38(第23図)** A地区北西部で検出したもので、桁行3間(4.3m)、梁行2間(4.2m)の純柱建物である。柱穴は直径0.5～1.0mの円形で、埋土は黒褐色ないし暗褐色である。いずれの柱穴からも時期が分かれる遺物は出土していないが、古墳時代後期のSK5の底面から柱穴を検査していることから、これ以前の構造であることが分かる。柱穴から時期が分かれる遺物は出土しておらず時期は不明である。



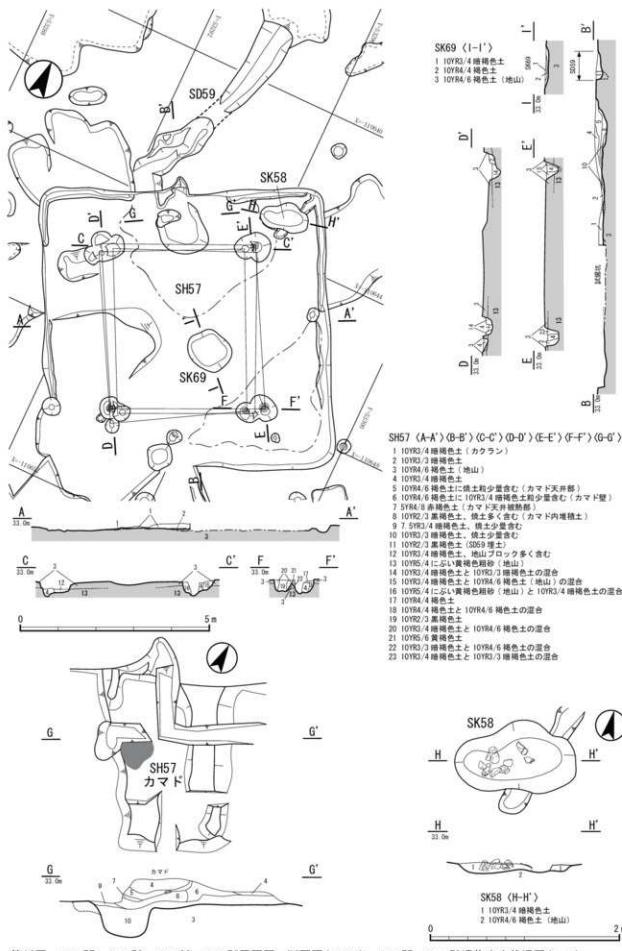
第16図 SH50・SH62・SB70平面図・断面図(1:100)、SH50・SH62遺物出土状況図(1:40)



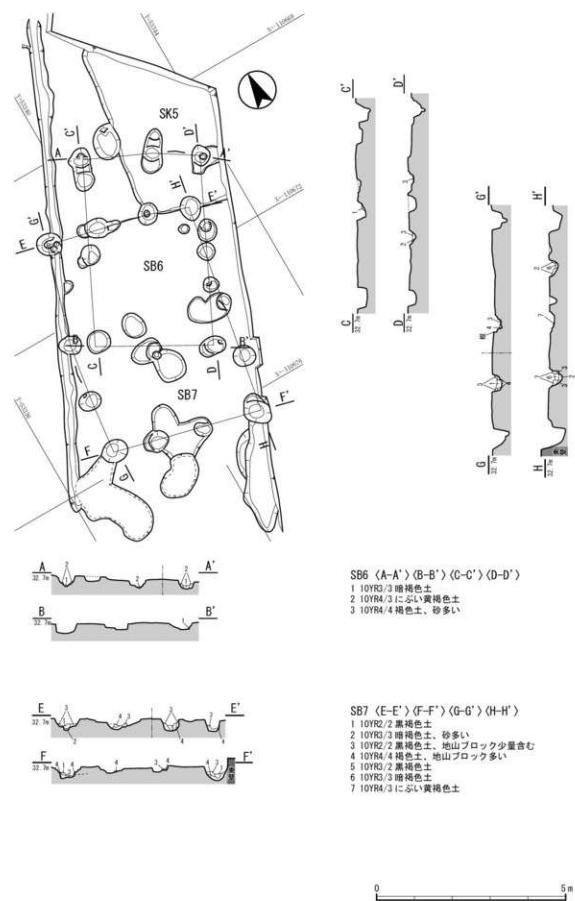
第17図 S H53・S B66・S K51・S K54平面図・断面図(1:100)、S H53遺物出土状況図(1:40)



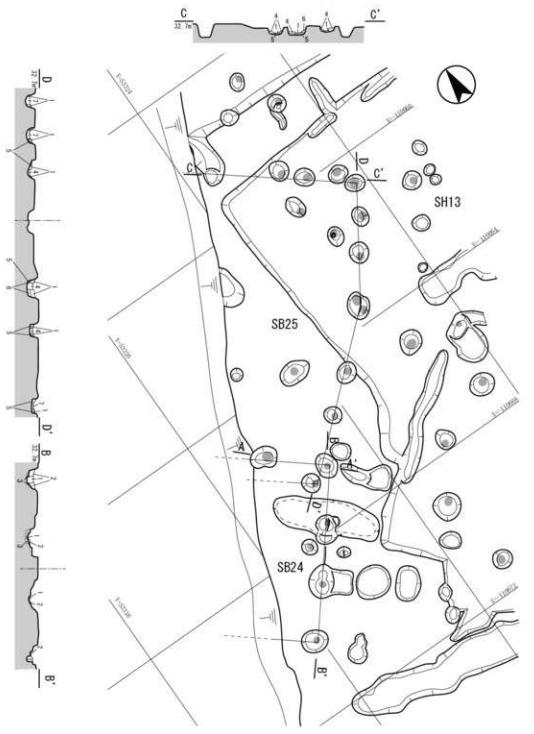
第18図 S H55・S B65・S K56・S K61平面図・断面図(1:100)



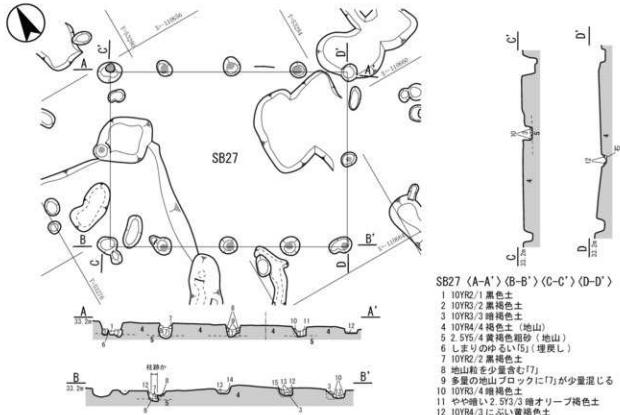
第19図 SH57・SK58・SK69・SD59平面図・断面図(1:100)、SH57・SK58遺物出土状況図(1:40)



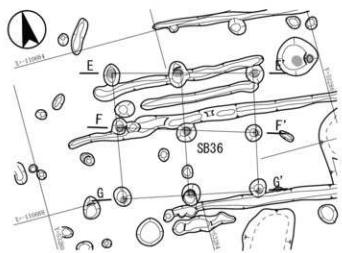
第20図 SB6・SB7・SK5平面図・断面図(1:100)



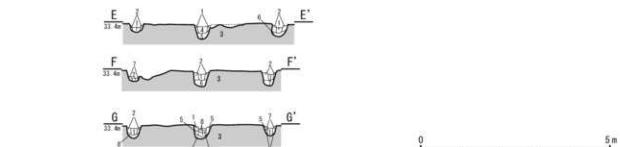
SB24-SB25 (A-A') (B-B') (C-C') (D-D')  
 1 I0YR2/3暗褐色土  
 2 I0YR2/3暗褐色砂質（地山）  
 3 植被足見りのI0YR3/3暗褐色土  
 4 I0YR3/4暗褐色土  
 5 I0YR3/3に多い黄褐色砂質  
 6 I0YR2/3暗褐色土  
 7 I0YR2/3黒褐色土  
 8 砂礫の多いTz  
 9 多量の砂礫のTz  
 10 I0YR2/4褐色土  
 11 やや暗い2.5Y3/3褐色オーフ褐色土  
 12 I0YR4/3に多い黄褐色土  
 13 I0YR2/3暗褐色土  
 14 多量の地山ブロックにTzが混じる  
 15 Tzに少量の地山ブロックが混じる  
 16 Tzに地山ブロックが多い混じる



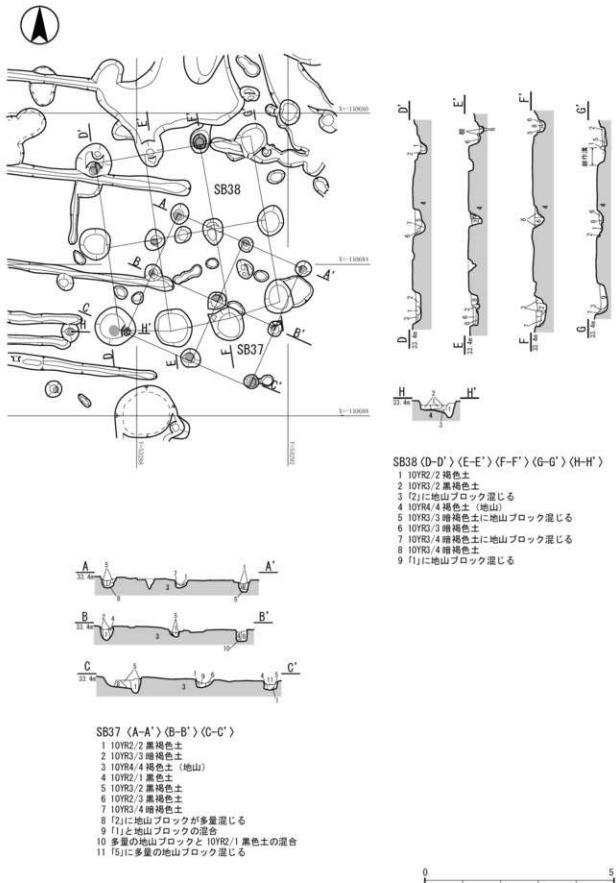
SB27 (A-A') (B-B') (C-C') (D-D')  
 1 I0YR2/1 黒色土  
 2 I0YR2/2 黑褐色土  
 3 I0YR2/3 暗褐色土  
 4 I0YR2/4 黑褐色土  
 5 I0YR2/4褐色土（地山）  
 6 しまりDnTz（埋没）  
 7 I0YR2/2 黑褐色土  
 8 地面を多少覆むTz  
 9 多量の砂礫のTz  
 10 I0YR2/4褐色土  
 11 やや暗い2.5Y3/3褐色オーフ褐色土  
 12 I0YR4/3に多い黄褐色土  
 13 I0YR2/3暗褐色土  
 14 多量の地山ブロックにTzが混じる  
 15 Tzに少量の地山ブロックが混じる  
 16 Tzに地山ブロックが多い混じる  
 17 Tzに地山ブロックが多量混じる  
 18 Tzに地山ブロックが多量混じる  
 19 Tzに地山ブロックが多い混じる



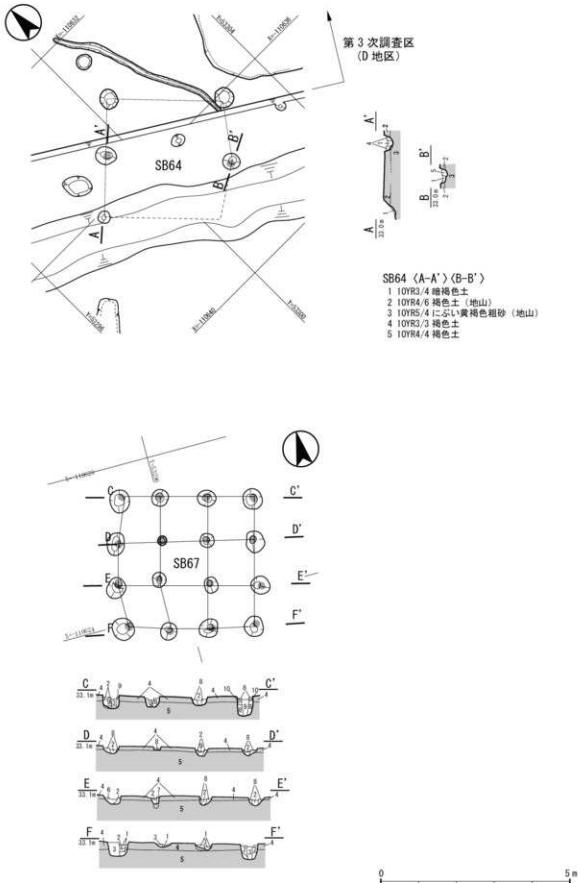
SB36 (E-E') (F-F') (G-G')  
 1 I0YR2/2 黑褐色土  
 2 I0YR2/3 暗褐色土  
 3 I0YR2/4 黑褐色土  
 4 I0YR2/1 黑色土  
 5 I0YR2/2 黑褐色土  
 6 I0YR2/3 暗褐色土  
 7 I0YR2/4褐色土  
 8 Tzに地山ブロックが多量混じる  
 9 Tzに地山ブロックが多い混じる



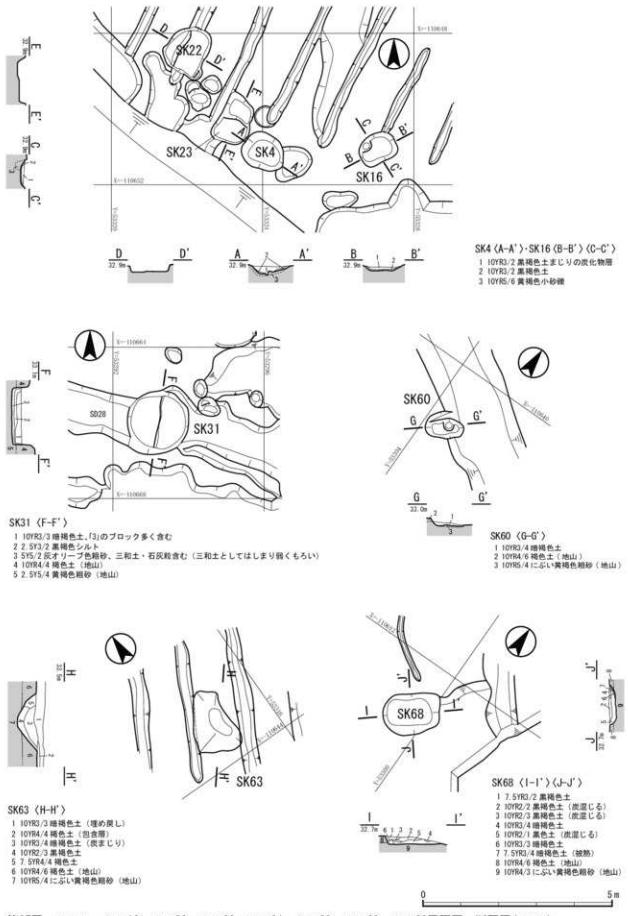
第21図 SB24・SB25平面図・断面図(1:100)



第23図 SB37・SB38平面図・断面図(1:100)



第24図 SB64・SB67平面図・断面図(1:100)



**S B64(第24図)** C地区とD地区(第3次調査区)にまたがって検出したもので、柱穴は円形で埋土は黒褐色である。南側は擾乱溝で破壊されている。桁行3間(3.4m)、梁行2間(3.0m)で、第3次調査で北辺の柱穴2個を確認し、建物のプランを確定させることができた。遺物は、北東隅柱穴から7世紀の須恵器が出土した(第3次調査の報告書に掲載)。遺物や埋土の状況などから古墳時代後期のものと考えられる。

**S B65(第18図)** S H55及びS H57と重複する桁行2間(4.0m)、梁行2間(3.7m)の側柱建物である。柱穴は円形で埋土は黒褐色である。時期は明確ではないが、近接した位置にあって方位を同じくするS B66が中世であるため、これも中世の可能性がある。検出段階では竪穴住居と類似した埋土のため、明確に前後関係を把握できなかった。

**S B66(第17図)** A地区とC地区にまたがって検出したもので、桁行3間(3.2m)、梁行2間(3.7m)の側柱建物である。柱穴は円形で埋土は黒褐色ないし暗褐色である。南西隅の柱穴から山茶碗が出土しており、中世のものと考えられる。

**S B67(第24図)** C地区北西部にある桁行3間(3.5m)、梁行3間(3.6m)の柱建物である。柱穴は円形で埋土は暗褐色ないし褐色である。外周の柱穴が中央部の柱穴より大きくなっている。西側柱列は中央2つが突出した配置になっている。これは、同じ柱建物のS B38でも見られた特徴であり、建物の入口構造に関係している可能性がある。土師器・須恵器が出土しており、古墳時代後期のものと考えられる。

**S B70(第16図)** S H150と重複しておらず、東西2間(3.3m)以上、南北1間(1.8m)以上の規模を持つ側柱建物である。柱穴は円形で埋土は黒褐色である。柱穴の1つはS H56のカマド下から検出した。時期は古墳時代後期であろう。

(3) 溝

C地区南北で、A地区で確認していた溝の延長と考えられる南北溝を検出した。しかしこの周辺は土壌改良による擾乱が著しく、構は断片的にしか残存していないかった。このほか、C地区の中央には東西に横る境界溝があり、擾乱溝として扱った。第1次調査でも多数確認していた桑の栽培に伴うと考えられる耕作溝は、調査区の北半で認められた。

**S D12(第26図)** B地区の南部で検出したL字形の土坑である。東西1.1m、南北1.0mで、検出面からの深さは0.4mである。埋土は暗褐色であり、土師器・須恵器がある。

**S D26(第26図)** A地区的西部で検出したL字形の平面プランをもつ溝である。長さ15.0m以上、幅0.8mで、検出面からの深さは0.1mである。埋土は暗褐色であり、S H8・S H11は古く、遺物は土師器・須恵器があり、古墳時代後期のものと考えられる。

**S D28(第26図)** A地区的中央部で検出したS D29と並行する東西溝である。長さ15.0m以上、幅1.2mで、検出面からの深さは1.5mである。埋土は暗褐色であるが、肥溜めと考えられるS K31がこの下から検出されていることから、近世の区画溝と考えられる。遺物は土師器がある。

**S D29(第26図)** A地区的中央部で検出したS D28と並行する東西溝である。長さ20.0m以上、幅1.0mで、検出面からの深さは10.1mである。埋土は暗褐色であり、時期は不明であるが、S D29と一連のものと考えられるが、南北に近世の区画溝であろう。遺物は土師器がある。

**S D30(第26図)** A地区的西部で検出したL字形の平面プランをもつ溝である。長さ16.0m以上、幅0.1m~2.3mで、検出面からの深さは0.3mである。断面土層から、何處か掘り直されたことが分かる。埋土は暗褐色であり、時期は不明である。S D26と一連のものである可能性がある。出土遺物はない。

**S D32(第26図)** A地区的東部で検出した溝である。長さ2.0m以上、幅0.4mである。陶器などが出土しており、時期は近世以降と考えられる。

**S D33(第26図)** A地区的中央部で検出したL字形の平面プランをもつ溝である。長さ5.6m以上、幅2.0mで、時期は不明であるが、位置からS D30の連続部分の可能性がある。出土遺物はない。

**S D34(第26図)** A地区的中央部で検出した東西溝である。長さ13.0m以上、幅4.0mで、検出面からの深さは0.3mである。埋土は暗褐色であり、S D30と一連のものである可能性がある。遺物は土師器・須恵器がある。

**(4) 土坑**

**S K4(第25図)** B地区的北部で検出した不整形の土坑である。東西1.1m、南北1.0mで、検出面からの深さは0.4mである。

第25図 S K4・S K16・S K22・S K23・S K31・S K60・S K63・S K68平面図・断面図(1:100)



第26図 SD12・SD26・SD28・SD29・SD30・SD32・SD33・SD34平面図(1:500)・断面図(1:100)

さは0.23mである。埋土は黒褐色土混じりの炭化物であり、火葬施設などの可能性を考えて掘削したが、人骨等は確認できなかった。遺物は須恵器がある。

**S K 5 (第20図)** S B 6・S B 7と重複して検出した方形土坑である。東西2.7m以上、南北5.0mで、検出面からの深さは0.15mである。埋土は黒褐色土混じりの炭化物であり、火葬施設などの可能性を考えて掘削したが、人骨等は確認できなかった。遺物は土師器がある。

**S K 16 (第25図)** B地区の北部で検出した不整形の土坑である。東西1.0m、南北0.9mで、検出面からの深さは0.15mである。埋土は黒褐色土混じりの炭化物であり、火葬施設などの可能性を考えて掘削したが、人骨等は確認できなかった。

**S K 22 (第25図)** B地区の北部で検出した不整形の土坑である。東西1.1m、南北1.3mで、検出面からの深さは0.2mである。遺物は土師器、須恵器がある。

**S K 23 (第25図)** B地区的北部で検出した不整形の土坑である。東西1.1m、南北1.3mで、検出面からの深さは0.2mである。遺物は土師器、須恵器がある。

**S K 31 (第25図)** A地区的北部で検出した円形土坑である。S D 25の下から検出した。直径1.6mで、検出面からの深さは0.5mである。壁面と底面には厚さ5cm前後の三和土が貼られており、肥溜めと考えられる。遺物は土師器、須恵器がある。

**S K 60 (第25図)** C地区的中央部で検出した楕円形の土坑である。東西1.0m、南北1.6mで、検出面からの深さは0.2mである。埋土は暗褐色である。遺物は土師器がある。

**S K 63 (第25図)** C地区とB地区の境界で検出した不整形の土坑である。東西1.2m、南北1.8mで、検出面からの深さは0.5mである。埋土は暗褐色で、炭化物を含む。出土遺物はない。

**S K 68 (第25図)** C地区的北部で検出した楕円形の土坑である。東西1.3m、南北1.6mで、検出面からの深さは0.2mである。埋土は黒褐色土混じりの炭化物であり、壁面に被熱も見られたことから火葬施設などの可能性を考えて掘削したが、人骨等は確認できなかった。遺物は土師器がある。

#### 4. 遺物

出土遺物は、第1次調査でコンテナバット36箱分、第2次調査で18箱分である。主体を占めるのは堅穴住居出土の7世紀前半を中心とする土師器・須恵器で

あり、少量の中世の遺物も見られる。

(1) 堅穴住居出土遺物(第27~29図)

**S H 1 (1~4)** 1・2は土師器の甕である。1はカマド付近で、2は住居中央付近の検出面近くのレベルで出土した。3は須恵器杯蓋、4は須恵器杯身で、いずれも7世紀前半のものである。

**S H 2 (5~8)** 5~7は土師器の甕である。8は須恵器杯蓋で7世紀前半のものである。

**S H 8 (9・10)** 9・10は須恵器杯身で、いずれも7世紀前半のものである。

**S H 10(11~13)** 11は土師器の甕である。12は須恵器杯蓋、13はやや大型の須恵器杯身で7世紀前半のものである。

**S H 11(14~18)** 14は土師器の甕である。15・16は須恵器杯蓋、17は須恵器杯身、18は須恵器短頸甕で7世紀前半のものである。

**S H 13(19・20)** 19は土師器の甕である。20は須恵器杯身で7世紀前半のものである。

**S H 15(21~23)** 21は須恵器杯身である。22は須恵器有蓋系の杯部で、脚部を欠いた後、破断面を削って平滑にしてある。23は須恵器無蓋高杯の杯部で、いずれも7世紀前半のものである。

**S H 18(24・25)** 24は土師器の甕である。25は須恵器杯身で、7世紀前半のものである。

**S H 19(26)** 26は須恵器有蓋高杯の蓋で、7世紀前半のものである。

**S H 35(27~29)** 27は須恵器杯蓋、28は須恵器杯身、29は須恵器蓋で、いずれも7世紀前半のものである。

**S H 39(30・31)** 30は須恵器杯蓋、31は須恵器杯身で、いずれも7世紀前半のものである。

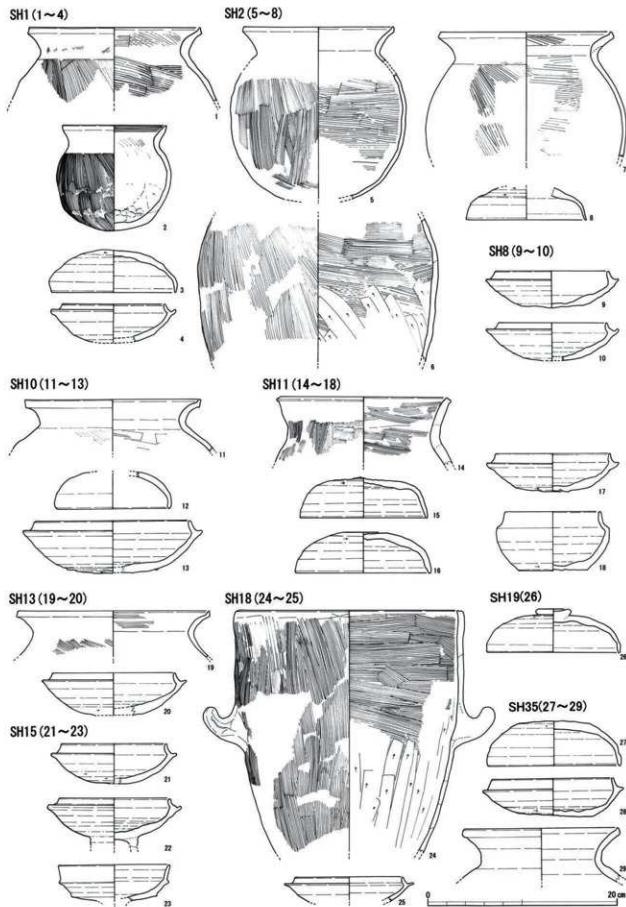
**S H 50(32~36)** 32・33は土師器の甕である。34は須恵器高杯の脚部で長脚二段三方カシを有するもの、35は須恵器杯蓋、36は須恵器杯身で、いずれも7世紀前半のものである。

**S H 53(37~47)** 37・38は土師器の甕、39は土師器の把手、40は土師器の瓶口縁部である。41は須恵器甕、42・43は須恵器杯蓋、44~47は須恵器杯身で、いずれも7世紀前半のものである。

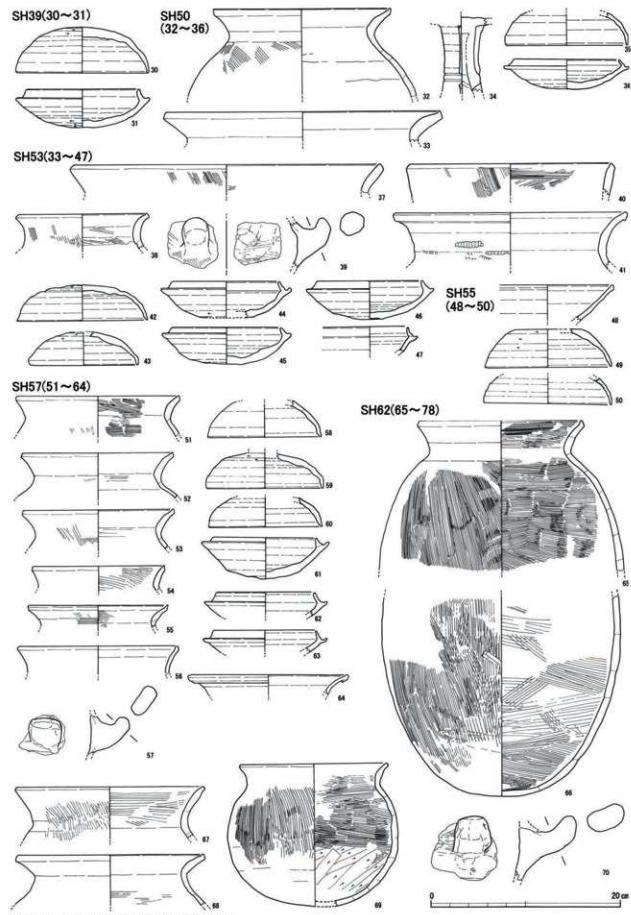
**S H 55(48~50)** 48は山茶碗で上層から混入である。49・50は須恵器杯蓋で、7世紀前半のものである。

**S H 57(51~64)** 51~56は土師器甕、57は土師器の把手である。59は須恵器有蓋高杯の蓋、58・60は須恵

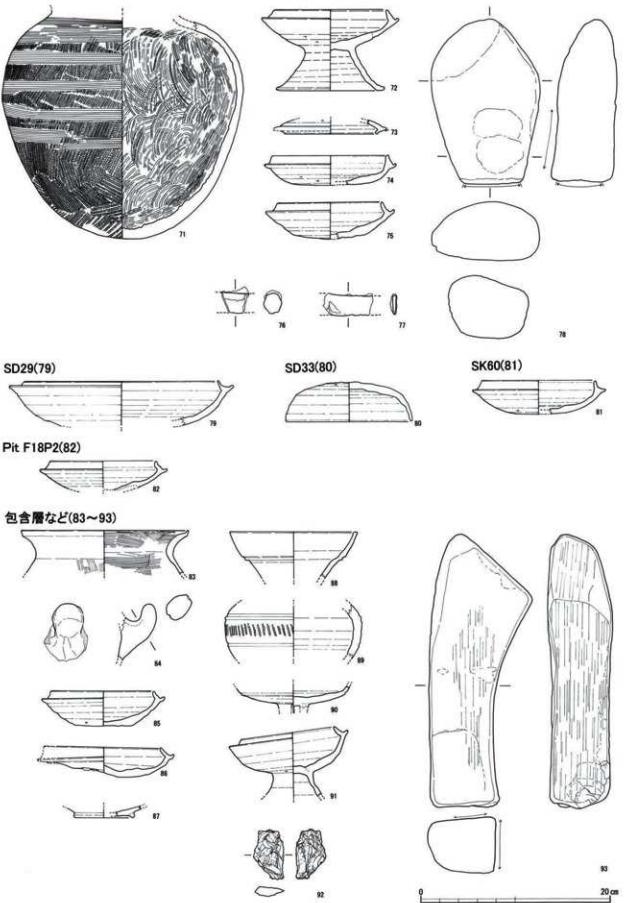




第27図 川向山添遺跡遺物実測図①(1:4)

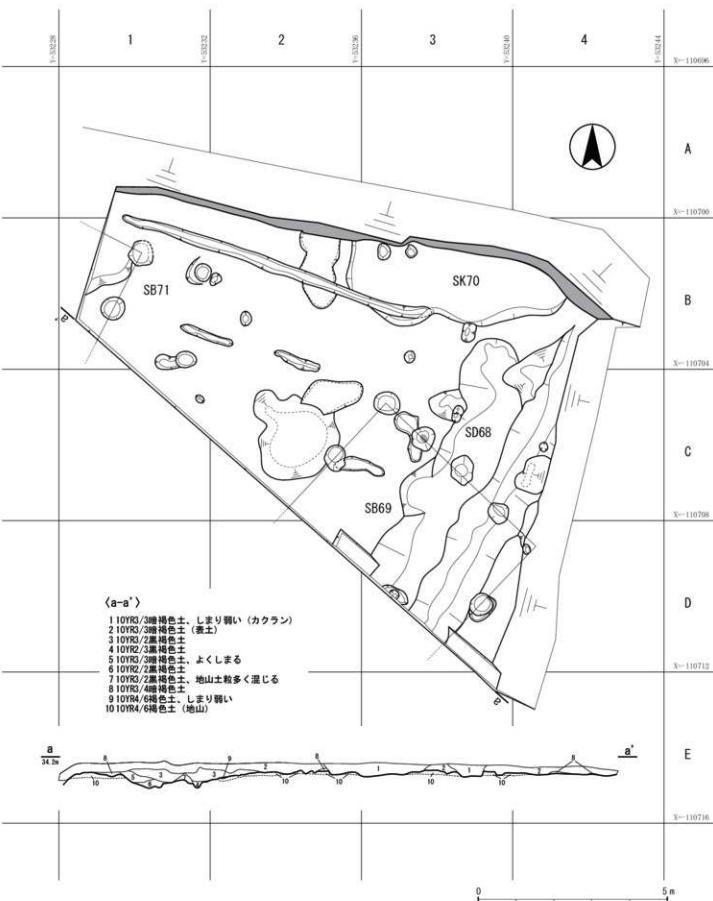


第28図 川向山添遺跡遺物実測図②(1:4)

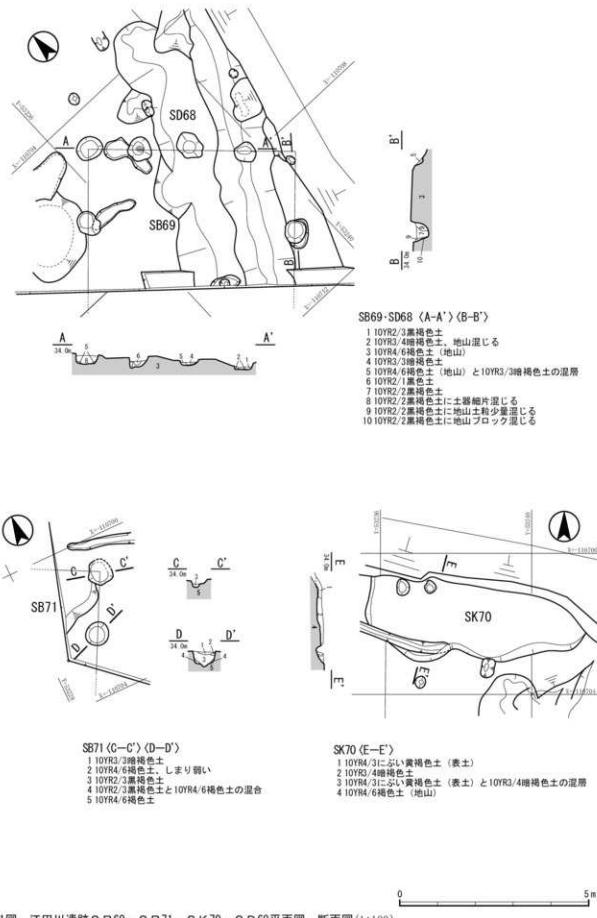


## 6表 川向山添遺跡遺物觀察表①





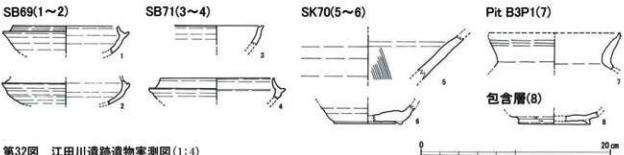
第30図 江田川遺跡造構配置図・南壁断面図(1:100)



第31図 江田川遺跡 S B69・S B71・S K70・S D68平面図・断面図(1:100)

遺構番号	跡跡	主軸・平面形	測量 (m)			出土遺物	備考	小地区
			前行・長さ	進行・幅	間隔・深さ			
SB69	古墳後壁	N-45°-B	0.7	0.7	4.2±2.1	土師器・漆器	骨付建物	02~04
SB71	古墳後壁	B-20°-E	1.0	1.8±1.1	4.0±2.1	土師器・漆器	骨付建物	01
SB98	平安	N-30°-E	10以上	2.0	0.4	土師器・漆器・瓦	土師器・漆器	01~03
SK70	中壁	不規則	5.9	2.2±0.1	0.2	土師器・漆器	陶器	02~04

第8表 江田川遺跡遺構観察表



第32図 江田川遺跡遺物実測図(1:4)

遺構番号	行数	柱立柱(出土位置)	埋蔵	目録	測量(1m)	調査区分の特徴	出土	測定	地質	構造(%)	備考
1	B-13-1	直通	柱直	-	11.2	内一コロナガ	前	直(山)Ⅱ(東)Ⅲ(西)	20		
2	B-15-2	F4	直通	柱直	12.4	内一コロナガ	前	直(山)Ⅱ(東)Ⅲ(西)	10	横断面観	
3	B-14-2	B1-2	直通	柱直	12.5	内一コロナガ	前	直(山)Ⅱ(東)Ⅲ(西)	20		
4	B-14-3	B1-2	土師壁	柱	11.9	高水層 内一コロナガ	前 側面	直(山)Ⅱ(東)Ⅲ(西) 側面分 墓(山)Ⅱ(東)	20		
5	B-14-4	B1-2	直通	柱直	14.4	内一コロナガ	前 側面	直(山)Ⅱ(東)Ⅲ(西) 側面分 墓(山)Ⅱ(東)	20		
6	B-14-5	B1-2	直通	柱直	7.2	内一コロナガ	前 側面	直(山)Ⅱ(東)Ⅲ(西) 側面分 墓(山)Ⅱ(東)	20		
7	B-14-6	B1-2	土師壁	柱	-	内一コロナガ	前	直(山)Ⅱ(東)Ⅲ(西)	20		
8	B-15-2	直通	柱直	柱直	7.4	内一コロナガ 内一コロナガ	前 側面	直(山)Ⅱ(東)Ⅲ(西) 側面分 墓(山)Ⅱ(東)	20		

第9表 江田川遺跡遺物観察表

## V. 結語

御台館地では、古くは柵場整備に伴う落川原遺跡の発掘調査<sup>(1)</sup>、近年では平成25年度に実施した江田川遺跡第1次調査<sup>(2)</sup>により、古墳時代後期から奈良時代を中心とする時期の集落が存在することが明らかとなっている。

今回調査を行った川向山添遺跡でも、7世紀前半の竪穴住居や掘立柱建物を多數確認した。江田川遺跡第2次調査の結果と合わせて、この時期の集落の範囲が江田川遺跡から川向山添遺跡にかけての範囲に間断なく広がっていた可能性が高いことが分かった。

一方で、川向山添遺跡B地区では、江田川遺跡では見られなかった一辺7mを越える比較的大型の竪穴住居が重複して建てられている。現在では木が茂って見通しがきかないものの、大型の竪穴住居が集中する付近は、本来海藏川沿いの低地を広く見渡すことがで

き、東方に目をやれば伊勢湾まで見通せる立地であった。こうした眺望の良い立地であるため、同位置で建て替えて居住が続けられたと考えられる。

このほか、江田川遺跡第1次調査で確認しているS B28やS B37のように、比較的大型の掘立柱建物の周辺に、それより小型の掘立柱建物が配置されるような状況は川向山添遺跡では見られない。

両遺跡は同時期の一連の集落であるが、建物の配置状況からは、その中でもエリアによって土地利用に差異があったと考えられる。

### 【註】

1. 三重県教育委員会 昭和48(1973)『昭和47年度墓葬開場整備事業地域 墓藏文化財発掘調査報告』

2. 四日市市教育委員会 平成28(2016)『江田川遺跡』



川向山添遺跡 A地区全景(東から)



川向山添遺跡 B地区全景(西から)

図版 2



川向山添遺跡 C地区全景(南から)



江田川遺跡 調査区全景(東から)

図版 3



S H 1 (北東から)



S H 1 カマド(南から)

図版 4

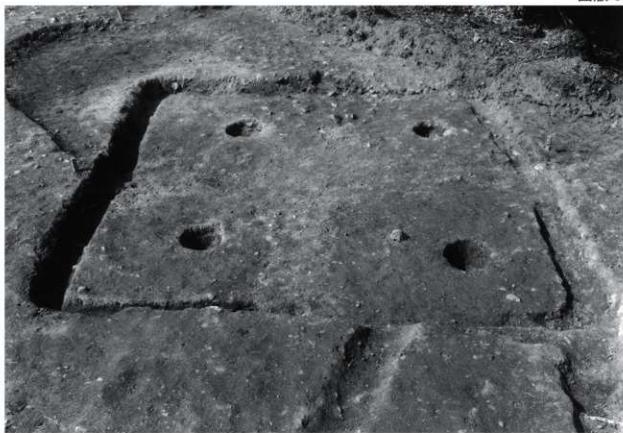


SH 2(南から)



SH 2 カマド(南西から)

図版 5



SH 8(南から)



SH 8 カマド(南から)

図版 6



S H10(南から)



S H10カマド(南から)

図版 7



S H11(南から)



S H13(南から)

図版 8



SH13・19(南から)



SH14(西南から)

図版 9



SH15(南から)



SH15カマド遺物出土状況(南東から)

図版10



S H18・20(南東から)



S H18カマド(南から)

図版11



S H19(南から)



S H19カマド(南から)

図版12



S H21(南から)



S H35(西から)

図版13



S H35カマド遺物出土状況(北から)



S H50(西から)

図版14



S H53遺物出土状況(東から)



S H53(北から)

図版15



S H55段下け状況(北東から)



S H55(北東から)

図版16



S H57(北東から)



S H57カマド(南東から)

図版17



S H62(西から)



S H62カマド(東から)

図版18



S B6・7(北西から)



S B6・7 完堀状況(南西から)

図版19



S B24(北東から)



S B27(東から)

図版20



S B36段下け状況(東から)



S B37・38段下け状況(南から)

図版21

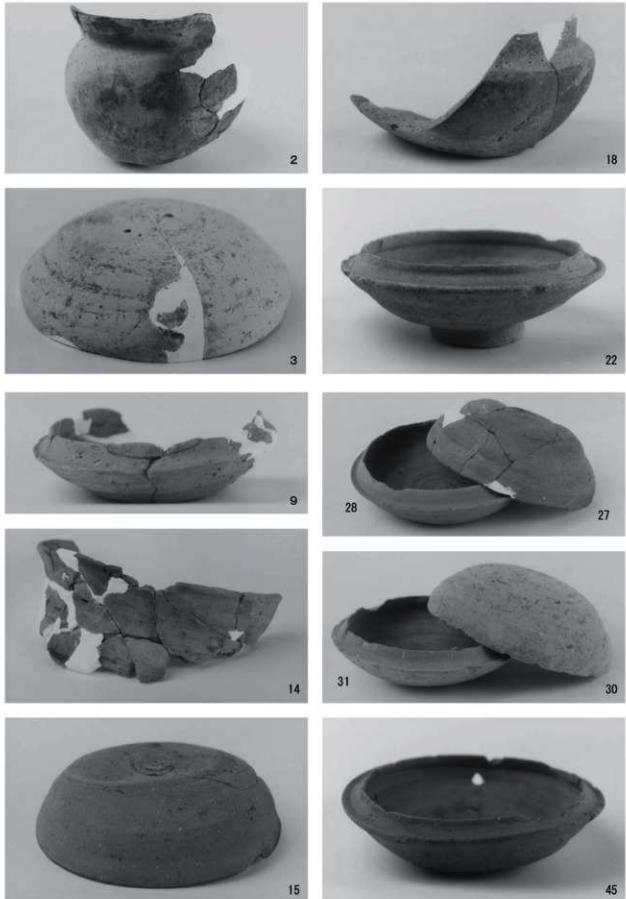


S B66段下け状況(東から)

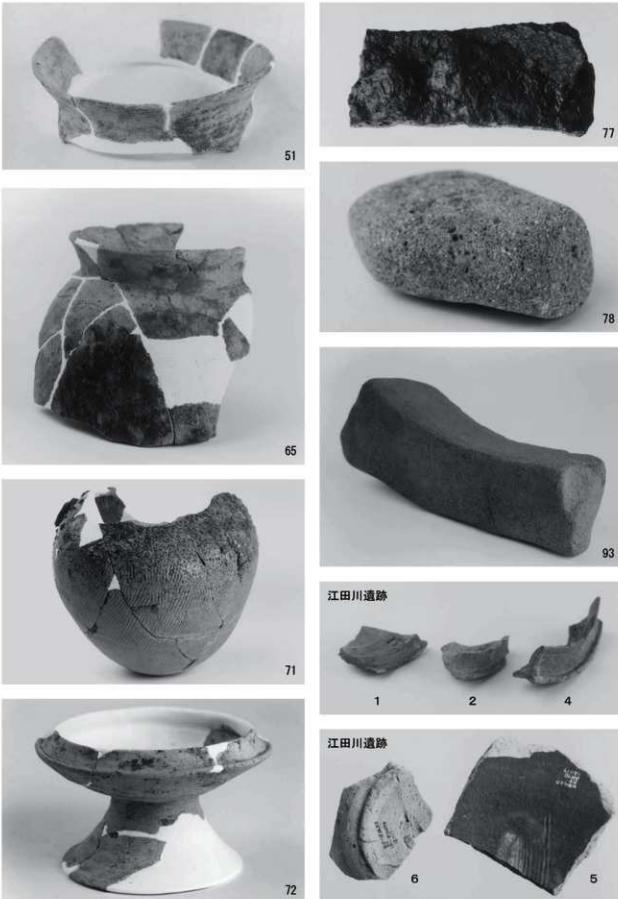


S B67段下け状況(北東から)

图版22



图版23



## 報告書抄録

ふりがな	そ う で て つ う け ん せ つ に と も な う ま い ゼ う ぶ ん か ざ い は っ く つ ち ょ う さ は う こ く え だ が な は せ き 3・か わ む か い や ま ざ え い せ き 2・よ こ だ に い せ き 2							
書名	送電鉄塔建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 江田川遺跡3・川向山添遺跡2・横谷遺跡2							
シリーズ名	四日市市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	58							
編著者名	山本達也・川崎志乃							
編集機関	四日市市教育委員会							
所在地	〒510-8601 三重県四日市市諏訪町1番5号 TEL059-354-8240							
発行年月日	2022(令和4)年3月31日							
所 収 遺 跡 名	所 収 遺 跡 地	コード	北 緯	東 緯	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因	
江田川遺跡	四日市市 にさかべちょう 西坂部町	24202	259	35° 00' 00" 35° 00'	136° 00"	20190509～ 20190607 (第3次調査)	206	送電鉄塔建設
川向山添遺跡	四日市市 にさかべちょう 西坂部町	24202	347	35° 00' 07" 35° 05"	136° 05"	20200525～ 20200603 (第3次調査)	169.7	
横谷遺跡	四日市市 にさかべちょう 西坂部町	24202	120	34° 59' 47" 34° 45"	136° 45"	20190716～ 20190806 (第2次調査)	277	
所 収 遺 跡 名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
江田川遺跡	集落跡	古墳・ 平安	掘立柱建 物・土坑・ 溝・ビット	土師器・須恵器、 灰釉陶器・鉄釘	古墳時代の土師器焼成土坑1基、平安時代の火 葬穴1基、掘立柱建物を1棟などを検出した。			
川向山添遺跡	集落跡	古墳	掘立柱建 物・溝・ ビット	土師器・須恵器	これまでの調査結果と合わせ、集落の居住域の 範囲がより明確になった。			
横谷遺跡	集落跡	縄文・ 古墳	掘立柱建 物・土坑・ 溝	土師器・須恵器・ 陶器	第1次調査で確認した古墳時代前期の集落の縁 部を調査した。			
要約	江田川遺跡では、平成25年に行った第1次調査で確認した集落の遺構が、さらにその西側にも広がっていることを確認し、集落の時期がこれまでの調査で判明している7世紀前半頃に加え、平安時代にもあったことが明確になった。 川向山添遺跡では、平成29年・30年に実行した第1次・第2次調査で確認した古墳時代後期の集落が、この場所にも広がっていたことが確認できた。これまでの調査結果と合わせると今回調査区以南に住居が集められた状況が明らかになった。 横谷遺跡では、調査の結果、平成29年に実行した第1次調査で確認した古墳時代前期の集落の範囲が、丘陵の西側にも広がっていたことが確認できた。ただし、主に検出されたのは土坑で、堅穴住居などを見られなかったことや、全体に西へ傾斜している地形であることから、居住域ではなく廐室土坑などが設けられた集落縁辺部に当たる場所と考えられる。							

四日市市埋蔵文化財発掘調査報告書58
<b>江田川遺跡3・川向山添遺跡2</b>
• <b>横谷遺跡2</b>
2022(令和4)年3月31日
編集発行 四日市市教育委員会